

ファカルティ・ディベロップメント推進事業実施報告書

目 次

I	平成 26 年度 FD 推進事業について	
	・平成 26 年度鳴門教育大学 F. D. 推進事業について……………	3
II	特別公開授業, 特別公開授業に係る授業研究会・FD ワークショップ	
	・平成 26 年度鳴門教育大学 F. D. 推進事業特別公開授業実施要項……………	7
	・平成 26 年度鳴門教育大学 F. D. 推進事業特別公開授業に係る授業研究会・FD ワークショップ実施要項……………	8
	○各コース実施報告書	
	人間形成コース……………	10
	幼年発達支援コース……………	12
	現代教育課題総合コース……………	14
	臨床心理士養成コース……………	17
	特別支援教育専攻……………	19
	言語系コース (国語)……………	21
	言語系コース (英語)……………	24
	社会系コース……………	26
	自然系コース (数学)……………	28
	自然系コース (理科)……………	31
	芸術系コース (音楽)……………	33
	芸術系コース (美術)……………	36
	生活・健康系コース (保健体育)……………	40
	生活・健康系コース (技術・工業・情報)……………	42
	生活・健康系コース (家庭)……………	44
	国際教育コース……………	47
III	平成 26 年度特別公開授業に係る全体会	
	・平成 26 年度鳴門教育大学 F. D. 推進事業全体会実施要項……………	51
	・FD 推進事業全体会……………	52
IV	公開授業週間	
	・平成 26 年度鳴門教育大学 F. D. 推進事業公開授業週間実施要項……………	85
V	平成 26 年度 FD 推進事業の成果と課題	
	・平成 26 年度 FD 推進事業の成果と課題……………	89
	おわりに……………理事・副学長 (教育・研究担当) 西園芳信……………	90

I 平成26年度FD推進事業について

平成 26 年度 鳴門教育大学 F. D. 推進事業について

『よい教師を育てる授業とは』

－カリキュラム全体を見通した授業改善－

－シラバスの内容を通した授業改善－

◆ 平成 26 年度 FD 推進事業の目的 ◆

鳴門教育大学は、教育実践学を中核とした学部・修士による 6 年間を見通した教員養成を目指すとともに、学校教育や教科教育の課題を解明できる実践的能力を育成することを中期目標の一つとして掲げています。この目標を達成するための方策として、FD（ファカルティ・ディベロップメント）推進事業を計画的に実施することを、中期計画の中に謳っています。

平成 21 年度から、全学組織として FD・SD 委員会を設置し、FD 事業をより一層推進することに努めてきましたが、平成 24 年度からは委員会を見直し、FD 専門部会を FD 委員会に格上げすることにより、より効果的に FD 推進事業を実施することとなりました。本事業は、本学教員の授業実践能力の向上と、授業に対する学生の認識の深化を図ることを目指すものであり、具体的には以下の 3 点を目的としています。

- ① 教員養成大学である本学における、教育実践力を培うためのよりよい授業のあり方を共有する。
- ② 教員養成大学である本学における、FD の在り方を構築する。
- ③ 本学の学生の現状を踏まえた、授業改善のための課題を明確にする。

本年度は、昨年度までと趣向を変えて、SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）における講師派遣事業の講演（講演講師：徳島大学宮田先生、提供プログラム：「学生の学びを促すシラバスの書き方」）を全体会においてお願いし、シラバスの機能と書き方について理解を深めるとともに、併せて、本学において本年度からシラバスに学修課題を記載したことに対する検証も実施することとしています。また、平成 24・25 年度特別経費（プロジェクト分）事業「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」で開発した小学校教科専門科目テキストを使用している授業を対象に特別公開授業を通じて、検証を行うとともに、同様に開発した、カリキュラム・ガイドブックを本事業で検証し、より緻密なガイドブックの作成を目指すこととします。

これら以外に、教職大学院の FD 実施状況についての報告を全体会において発表してもらうこととしています。

FD 推進事業については、全教員が協同して取り組むことが望まれています。各教員には、各 FD 推進事業に是非ご参加いただきますよう、お願いいたします。

◆ 公開授業週間 ◆

【目的】 公開授業週間においては、教員相互の授業参観を通して授業改善に取り組む意識を高めるとともに、具体的な授業事例をもとにして各教員の授業改善を図ることを目的とする。

【期間】 平成 26 年 10 月 14 日(火)～ 10 月 20 日(月)

(参観申込期日：平成 26 年 10 月 8 日(水))

◆ 特別公開授業，特別公開授業に係る授業研究会・FD ワークショップ ◆

【目 的】 特別公開授業は，モデルカリキュラムで作成した小学校教科専門科目テキストを使用している授業を中心に，実施し，公開された授業に係る授業研究会を実施することを通して，モデルカリキュラムのより一層の充実を図ることを目的とする。また，このテキストを使用していないコースについては，従前どおり，他教員の優れた授業実践を参観し，公開された授業に係る授業研究会を実施することを通して，教育実践力を培うためのよりよい授業のあり方を共有することを目的とする。

FD ワークショップは，教員養成における FD の特性と意義に関する認識を深め，本学 における FD の在り方を構築することを目的とする。今年度の FD ワークショップは特別 公開授業の授業研究会と連動し，モデルカリキュラムで作成した小学校教科専門科目テキストについて，意見交換を行う。

【期 日】 平成 26 年 10 月 14 日(火)～ 10 月 27 日(月)

【対象者】 本学教員，大学院生及び学部生

【会 場】 FD ワークショップ実施要項 参照

◆ 全体会 ◆

【目 的】 ≫ SPOD 派遣講師事業の講演

≫ シラバス及びモデルカリキュラムで作成した小学校教科専門科目テキスト並びにカリキュラム・ガイドブックの検証

≫ 教職大学院における FD 実施状況の報告

上記について，講演，発表，報告及び質疑応答を通じて全体会として展開することで，今後の，授業改善等に繋げることを目的とします。

【日 時】 平成 26 年 10 月 29 日(水) 13 時 10 分～ 16 時 10 分

【会 場】 B 101 講義室

【講 演】 講演者 SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）における講師
徳島大学教育改革推進センター 准教授 宮田政徳
演 題 「学生の学びを促すシラバスの書き方」

Ⅱ 特別公開授業, 特別公開授業に係る 授業研究会・FDワークショップ

平成 26 年度鳴門教育大学 F. D. 推進事業 特別公開授業実施要項

1 目的・意義

特別公開授業は、平成 24・25 年度特別経費（プロジェクト分）事業「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」で開発した小学校教科専門科目テキストを使用している授業を中心に実施し、公開された授業に係る授業研究会を実施することを通して、モデルカリキュラムのより一層の充実を図ることを目的とする。

FD 推進事業に各教員がより一層参加できる環境を整えることを企図し、特別公開授業を各コースにおいて設定している。今年度は、モデルカリキュラムで開発した小学校教科専門科目テキストを使用している授業を主に実施する。また、この小学校教科専門科目テキストを使用していないコースについては、従前どおり各教員の専門領域に関連する授業を参観し、授業研究会で討議することを通して、教育実践力を培う授業のあり方をそれぞれの授業と関連づけて考究することが期待できる。

2 対象者 本学全教員、大学院生及び学部生

3 期 日 平成 26 年 10 月 14 日(火)～平成 26 年 10 月 27 日(月)

4 特別公開授業 日程

コース等	授業名	実施日の担当教員	授業日	曜日	時限	教室等
人間形成	教育哲学演習	木 内 陽 一	10 / 16	木	3	B105
幼年発達支援	保育内容（人間関係）	浜 崎 隆 司	10 / 16	木	2	B201
現代教育課題総合	人間と環境 I	田 村 和 之	10 / 17	金	4	B206
臨床心理士養成	面接指導基礎演習	久 米 禎 子	10 / 17	金	3	社会連携センターセミナー室
特別支援教育	教育実践フィールド研究	田中淳一, 津田芳見 島田恭仁, 大谷博俊	10 / 15	水	4	B104
言語系（国語）	国語科授業演習	幾 田 伸 司	10 / 16	木	2	B303
言語系（英語）	英米文学研究 I	杉 浦 裕 子	10 / 21	火	4	B306
社会系	地理学概論	畠 山 輝 雄	10 / 15	水	2	B203
自然系（数学）	幾何学 II	松 岡 隆	10 / 15	水	2	B105
自然系（理科）	化学 II	胸 組 虎 胤	10 / 16	木	4	C403
芸術系（音楽）	初等音楽 I	松 岡 貴 史	10 / 17	金	1	D201
芸術系（美術）	美術理論・美術史 I	小 川 勝	10 / 21	火	4	D202
生活・健康系 （保健体育）	スポーツトレーニング論	南 隆 尚	10 / 16	木	2	E202
生活・健康系 （技術・工業・情報）	電気基礎	宮 本 賢 治	10 / 20	月	4	B302
生活・健康系 （家庭）	家庭経営学概論	黒 川 衣 代	10 / 27	月	4	C105
国際教育	国際教育協力特論 II	小 澤 大 成	10 / 27	月	3	B208

※ 特別公開授業は全教員、大学院生及び学部生への公開とする。

5 特別公開授業に係る授業研究会について

- 特別公開授業については、授業終了後に授業研究会を実施する。授業研究会は、FD ワークショップと同時開催とする。
- 授業研究会の日程、実施要領については、特別公開授業に係る授業研究会・FD ワークショップ実施要項を参照のこと。

平成 26 年度鳴門教育大学 F. D. 推進事業

特別公開授業に係る授業研究会・FD ワークショップ実施要項

1 目的・意義

FD ワークショップは、教員養成における FD の特性と意義に関する認識を深め、本学における FD の在り方を構築することを目的とする。今年度の FD ワークショップは特別公開授業の授業研究会と連動し、「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」で開発した小学校教科専門科目テキストについて、意見交換を行う。また、このテキストを使用していないコースについては、従前どおり、具体的な授業を素材として教育実践力を培う授業の在り方を検討する。

本ワークショップを通して、各教員が教育実践力を培う授業のあり方を共有し、教員養成大学である本学における FD についての理解を深めることが期待できる。

2 対象者 本学全教員，大学院生及び学部生

3 期 日 平成 26 年 10 月 14 日(火)～平成 26 年 10 月 27 日(月)

4 テーマ 『よい教師を育てる授業とは』

5 特別公開授業に係る授業研究会・FD ワークショップ 日程

コ ー ス 等	司 会	実施日	曜日	時限	教 室 等
人間形成	山 崎 勝 之	10 / 16	木	4	B105
幼年発達支援	田 村 隆 宏	10 / 16	木	3	A512
現代教育課題総合	谷 村 千 絵	10 / 17	金	5	B206
臨床心理士養成	中 津 郁 子	10 / 22	水	3	A419
特別支援教育	高 原 光 恵	10 / 15	水	5	B104
言語系 (国語)	黒 田 俊 太 郎	10 / 16	木	5	国語ゼミナール室
言語系 (英語)	藪 下 克 彦	10 / 21	火	5	B306
社会系	梅 津 正 美	10 / 16	木	6	A215
自然系 (数学)	成 川 公 昭	10 / 17	金	2	C716
自然系 (理科)	胸 組 虎 胤	10 / 16	木	5	C403
芸術系 (音楽)	頃 安 利 秀	10 / 17	金	3	D201
芸術系 (美術)	鈴 木 久 人	10 / 21	火	5	D202
生活・健康系 (保健体育)	木 原 資 裕	10 / 16	木	昼	E202
生活・健康系 (技術・工業・情報)	伊 藤 陽 介	10 / 20	月	5	B302
生活・健康系 (家庭)	松 永 哲 郎	10 / 27	月	5	B103
国際教育	石 村 雅 雄	10 / 27	月	4	B208

※ 特別公開授業に係る授業研究会，FD ワークショップは，全教員，大学院生及び学部生への公開とする。

6 特別公開授業に係る授業研究会・FD ワークショップ 実施要領

- 「特別公開授業に係る授業研究会」は、「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」で開発した小学校教科専門科目テキストを使用した授業のあり方について、特別公開授業を素材として検討する。
- 「FD ワークショップ」は「特別公開授業に係る授業研究会」と連動し、特別公開授業を素材として、上記のテーマについて検討する他、「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」で開発した小学校教科専門科目テキストの課題についても議論する。

7 「特別公開授業・FD ワークショップ実施報告書」について

- 特別公開授業・FD ワークショップについては、コースごとに報告書を提出する。
- 報告書には、以下の内容を記載する。

 標題：特別公開授業・FD ワークショップ実施報告書（コース名）

- 1 特別公開授業名
- 2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数
- 3 授業概要
- 4 授業研究会要録
- 5 FD ワークショップ要録

 *要録については、討議の逐語録でも討議結果の概要でもよい。

- 報告書の分量は A 4 サイズ 2 ページ程度とするが、上限は設けない。
- 提出先：教務企画課学部教務係（gakubu @ naruto-u.ac.jp）
- 提出期限：平成 26 年 11 月 28 日（金）

【人間形成コース】

報告者：山崎勝之

1 特別公開授業名 教育哲学演習

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成26年10月16日(木) 第3時限・B105教室・木内 陽一・2名・1名

3 授業概要

西田幾多郎『善の研究』（講談社学術文庫）第3編を読み、レジюмеを作成して発表する。発表内容について議論する。

4 授業研究会要録

・まず、教育哲学と言いながらも、テキストとして使用している、難解な哲学書を読む意義について話題となった。

木内教授の回答：もちろん本学は教員養成を目的とした大学であり、教育実践力を身につけることを第一義にしている。しかし教員養成の基盤には、人間形成があり、それは、あるスキルを身につけるだけにはとどまらない。スキルだけならば、専門学校に行けばよい。大学、大学院の使命は、学問を通じて個々の人間を陶冶することである。そのためには、先人の書いた（教育）哲学書を塾読するのが一番だ。教育の哲学的アプローチは、その人の人間的な深まり、成長と密接につながっている。

・西田幾多郎の哲学と人間形成論のつながりについて

木内教授の回答：初期西田の問題関心は、「実在」とは何かということだ。つまり、とらわれていない目でこの世界をみたい、という強い願望だと思う。それを突き動かしているのは、この世界は神の現れである、現れた神を見たい、ということだろうと思う。この願望は、「真の自己」とは何か、と言う問いと、表裏一体をなしている。人間形成論の立場から重要であるのは、この「真の自己」の追求ということになる。

・受講生のレジюмеの作り方の指導について

木内教授の回答：演習形式の授業での発表レジюмеの作成については、通常、学部で十分な指導を受けていなければならない。しかしこの前提が、必ずしも満たされていないのが現状だ。そこで私は発表レジюмеにおいては、大きく表現すれば、以下の二点が含まれていなければならないと指導している。つまり、①西田は担当した章でどんなことをいっているか、まとめなさい。②西田の行っていることに対して、あなた自身はどう考えるか、をまとめなさい。

多くの受講者は、しだいに上記の事は出来るようになるので、さらに、以下の要求をすることが多い。③他の思想家、文学者の立場と西田の論を比較、分析して、西田論をさらにつき離して、客観的に捉えるようにしなさい。

しかしこれは、ほとんどの受講者にとって難しい要求だ。なぜなら、自分が熟読した他の思想家、他の文学者がいないのだ。ここに本学学生、大学院生に共通する、木内にとっての物足らなさがある。

・テーマである「よい教師を育てる授業とは」に対する木内の考えは如何。

木内教授の回答：よい教師の「よい」をどう考えたらよいかの問題だ。木内の教育的信念は、児童、生徒、学生の「名前を覚えること」であるが、これは授業の問題ではない。ここまで述べてきたこととの関連で言えば、よい授業とは、「教師自身がその授業を楽しんでいる姿を受講生に見せる授業」ではないかと思う。言葉を換えていえば、スキルの伝達ではなくて、授業者自身の人間性ということになろう。大学での授業で言えば、授業者の教育行為を支える、その人の教養を感じさせる授業をしたいと念じている。

最近、教育実習生の授業を見ることが多いが、「話し言葉」の美しい教生がほとんどいない。私の学部時代の国語科教育学の石井茂先生、本学元学長の野地潤家先生の話ことばや朗読は大変美しかった。大学教員も含めて、教壇に立つ者の「話し言葉」についても、さらに考えていきたいものだ。(終)

【幼年発達支援コース】

1 特別公開授業名 保育内容（人間関係）

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成 26 年 10 月 16 日(木) 第 2 時限・B201 教室・浜崎 隆司 教授・38 名・4 名

3 授業概要

子ども愛着形成にかかわる場面の事例を挙げて、ビデオ資料を視覚的に提示しながら子どもの愛着形成とそれに対応した社会性がどのように発達するかについて養育者・保育者とのかかわりの観点から講義された。

まず、自分を中心として、母親、父親、兄弟、祖父母、友達、親友、恋人、ペットとの関係を思い浮かべさせ、愛着関係の質的な問題に触れ、愛着対象が安全基地という機能を持つことに受講者に気づかせた。そして、その愛着が形成されるには、まずは養育者との間に基本的信頼感が築かれなければならないことを説明された。具体的には生まれたばかり乳児にとって、“自分は生まれてきてよかった”という認識を持たせることが大切であり、“わたしは知らない子だ”という認識を持たせてはいけないということが強調された。それを踏まえて、乳児が母親と一緒にいる場合と知らない人と一緒にいる場合の反応の違いや、母親が離れていった場合の後追いの場面が動画で紹介され、子どもにとって特定の養育者である母親の存在が安全基地としていかに大切なものであるかについて説かれた。そして、愛着の形成過程では生後 7 ヶ月に母親と他人に対する反応が少しずつ異なってくる人見知りが始まり、8 ヶ月で後追いが見られ始め、10 ヶ月で母親と知らない他人とははっきりと区別するようになるという発達段階についても説明された。最後にこの愛着形成に関して養育者ではない保育者が愛着対象になり得るかという問題を投げかけ、保育者が子どもとの愛着関係を築くために必要な事とは何かということを考えさせた。

4 授業研究会及びFDワークショップの要録

本授業では、参観者が担当教員と同じコースに属する教員 4 名のみであり、授業研究会とFDワークショップを併せて行ったため、要録では両方を併せて記述する。

授業研究会で参加者から出された意見が「学部 1 年生の授業ということもあって、導入も工夫されており、学生の理解を確かめながら授業を進行されていた。また、視聴覚教材を織り込まれているのも、学生の理解向上に有効だと思った。さらに、動画をポイントとなる時点で止めて、注目すべき所を指摘したり解説をしたりしながら受講生の理解をさらに深めているところは、視聴覚教材の使い方としても有効であり、大いに参考になった。」「友達に“お金はいくらまでかせるか”“輸血は何CCまでOKか”“実在でなくてもアニメやペットでも愛着はありえるか”など、受講の学生に自分の問題として考えさせていたところは参考になった。」「具体例が、ストーカー、恋愛、大学生活、結婚詐欺、テレビドラマなど実に豊富で、学生にとって心理学が生活に密着しているように感じたと思う。」ということであり、対象である学部 1 年生に対する講義として、具体例や進行、提示資料、視聴覚教材について入念に工夫

されていること、主要テーマへの導入も、日々の生活の中から考えやすいように工夫されており、受講生の理解をより深めることに役立っていたということが指摘された。担当教員からは、これらの点について今後の講義においてもさらに洗練させていくとのコメントがあった。

FDワークショップでは、本講義のさらなる改善点について討議された。特に授業者から出された意見が「最後に投げかけた“保育者が愛着対象となり得るか”という問題について、時間的制約もあったかもしれないが、中途半端に終わってしまった。」ということであった。参加者からは、確かに指摘された問題点はあったように感じられたとの意見も出た。そこで、授業者から、今後は扱う内容を考えつつ時間的調整をする必要があることに加えて、次回の講義では、この問題についてしっかりと議論できる時間を取りたい、ということが指摘された。

総じて、授業内容は保育の実践場面で不可欠になる子どもとの愛着関係を直接扱ったものであり、保育者が身につけなければならない幼児の社会性の発達に関わる極めて重要な知識を得る機会となっていることから、教育実践力を養うという点で優れた講義のあり方を示すものであり、参観者にとっても大いに参考になる授業であった。

文責・田村隆宏（幼年発達支援コース）

【現代教育課題総合コース】

1 特別公開授業名 「人間と環境 I (基礎研究)」

2 授業日(曜日)・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成26年10月17日(金) 第4時限・B206教室・人文・社会系教育部 田村 和之・
7名・3名

3 授業概要

授業タイトル 環境教育の実践

授業のねらい 前時では小中学校の教育の中で環境教育をどのように扱うか、環境教育推進法や環境教育等促進法をもとに講義を行った。本時では前時の講義をもとに、実際に教員が環境教育を行う上で、どのような課題があるのか、また、実際に環境教育を行うにはどのように行えば良いのかを例題を示しながら理解してもらうのがねらいである。そして授業後半では学生自ら考えだした徳島の伝統・文化・特産品・自然をどのように環境教育の教材として使用するのかを考えさせる(課題として提出)。

教材など ・パワーポイントによるスライド24葉提示

・2年前の本授業で学生から提出されたレジュメと発表用パワーポイント(計3例)

評価の観点 本日までの講義をもとに、教材開発の候補となるテーマを各自で考えだすことができたか、また、全員でその教材テーマを共有し分配(一人当たり3テーマ)することができたか。

4 FDワークショップ

日時・会場 平成26年10月17日(金) 第5時限, A218合同研究室

授業者 人文・社会系教育部 田村 和之 講師

参観者 人文・社会系教育部 太田 直也 教授, 小西 正雄 教授, 谷村 千絵 准教授

注: 金野 誠志 准教授と藤村 裕一 准教授は公務出張のため欠席

授業科目名 人間と環境 I (大学院専門科目, 2単位)

内 容

〈カリキュラムについて〉

この授業は、現代教育課題総合コースの「探究領域」科目として設定されたものである。現代教育課題総合コースではすべての授業を「コア領域」「複合領域」「探究領域」の3つに分類し、それぞれの授業の位置づけを明確に示すとともに、内容的な関連についても十分な配慮のもとに展開している。また、すべての授業について重複開講がないよう時間割を設定している。

このようなカリキュラム戦略は今回のFD授業でも見事に功を奏したと言える。今回の「人類と環境 I」(探究領域)は環境教育の基礎についての内容であったが、この授業に先立つ同日3時間目の「現代総合学習論」(コア領域)において受講生は、総合学習という異なる概念下の教育課程にお

いて、環境教育が現実にはどのように扱われ、また本来はどのように扱われるべきかについて学んでいる。それを受けてのFD授業であり、受講生は、総合学習の一部としての環境教育と、本来独自の概念枠であるところの環境教育との整合性のむずかしさについて実感できたはずである。またこのFD授業のあと、翌週の月曜日の2時間目を開講される「現代の諸課題と学校教育Ⅱ」（コア領域）においては、我が国における実践例をとりあげつつ、環境教育の諸問題について具体的に考える場が用意されている。受講生はこれらの3つの連続する授業を受講することで、環境教育の現状と課題について多方面から文字通り総合的に考察を深めることができたはずである。もちろん、3つの授業の受講生がすべて共通しているわけではなく、また今回のFD授業の受講生が7名と少数であったことから、以上の戦略のメリット・デメリットについて短絡的に検証することは難しい。今後は、コースのカリキュラム戦略をよりわかりやすく受講生に明示して多くの受講生を参集し、より高い学習効果の実現をめざすことが課題となろう。

元来FD授業は、それのみ、すなわち90分の授業内容の当否のみで議論される嫌いをなしとしなが、今回の試みは、そのような単発評価ではなく、コースで提供している他の授業群とのどのような関連においてこのFDが試みられているか、そして、それがどのような結果をもたらしているかについて考察しようとするもので、授業の評価もさることながら、今後のFDの在り方についても一石を投じる意義深いものであったと言える。

<授業の方法について>

- ① パワーポイントのスライドを印刷したものを配布していたが、穴埋め式になっていた。受講生は、ただ講義を聞くのではなく、重要箇所では資料に書き込みをしながら聞いていた。
- ② 授業の最初に、これまでの授業の流れの説明があり、本時の説明があった。
- ③ 授業の最後には、次回以降の説明があり、環境教育のテーマについて、教材作成の可能性を考えて調べ発表することが課題として提示された。具体的なテーマは、学生自身が考えて、全体でシェアしたうえで選ぶ方法がとられていて、広がりや平等性がありよかった。（大判のカラー付箋紙は便利そうよかった）
- ④ テーマの選定や発表例に、以前の受講生の事例がいくつか示され、課題が明確になっていた。

<授業内容について>

- ① 環境教育の内容が幅広いものであることがよくわかった。
- ② 教材を考えるうえで、子どもの身近なものを題材にすることが提案されていて、理解しやすかった。

<総括>

本授業では、環境という概念のとらえ難さからはじまって、それを現行の学校教育のなかでどのように子どもに教えていくのか、問題の指摘も含めて概説があった。そのうえで、今後の授業で学生には具体的な環境教育のテーマの可能性について調べ、考えるという課題が出され、そのための実質的な手立てがなされていた。

授業の片々については、課題も少なくはなかった。基本的な教育関連用語の扱いに誤解を招くような表現があったり、教師の説明が中心になっていたり、学生用資料が参観者に配布されなかったことなどが残念だった点である。

ただし、授業者がもともと物理学ないし民族学の研究者であり、必ずしも教育実践系の知識に通

曉していないことは事実である。それを咎めることも容易であるが、むしろここでは、コース担当の複数の授業者の協働体制の構築の大切さについて言及しておきたい。つまり専門科学の研究にすぐれた実績をもつ教員が同時に教育実践についても相当な見識をもつというのは現実問題としてかなり無理があり、個々の教員にそのような過重な要求をすることよりも、教員それぞれの個性すなわち経歴や業績を十全に活かすかたちで授業内容を再構成し、複数の教員でそれらを相互に補完し合うシステムのカリキュラム展開をめざす方が現実的ではないかという視点である。今回で言えば、授業者が教育についていささか背伸びをしながら論じているさまが看取された。むしろ授業者には専門的知識を縦横に活かして宇宙的視野から環境と人間について自由に論じていただき、教育としての側面については他の教員に譲るという選択肢があってもよかったのではないかと感じられた。この点については、前項で述べた授業群の相互関連カリキュラムの構築の必要性と合わせて今後の課題とされるべきであろう。

また、討論においては「環境」のように厳密な定義の難しい概念を教育課題におくことについての問題提起もなされた。たしかに、「環境」は定義が難しい概念だが、学校教育での授業づくりにあたっては、テーマに合わせて暫定的ではあっても定義を試みるか、あるいは定まりがたい「環境」への一つの具体的なアプローチとして、授業の目的を明確にするなどの対応が必要ではないだろうか。

また、本時では身近なもの、ローカルなものから環境を考えることが推進されていたが、それは環境教育の一部であっても全てではないという認識を示す必要があるのでは、という指摘がなされた。授業者からは本時の授業時間以外で、すでに示されているとの説明があった。

【臨床心理士養成コース】

1 特別公開授業名 面接指導基礎実習

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成 26 年 10 月 17 日(金) 第 3 時限・地域連携センター セミナー室・久米 禎子・7 名・5 名

3 授業概要

本授業は大学院 1 年次の学生を対象としている。大学院 2 年次に実施される「面接指導実習」に向けて、具体的な事例に対応できるだけの臨床心理学的面接の基礎を学ぶことを目的としている。年度はじめに面接指導にあたる教員（スーパーヴァイザー）が割り振られ、そのスーパーヴァイザーのもとで 1 年間指導を受ける仕組みとなっている。

具体的な授業内容は授業担当者に任されており、今回、特別公開授業を行った担当者はおもに文献講読を行っている。授業担当者が指定した文献を数回に分けて全員で読み進めていく。1 回につき 2 人もしくは 3 人の担当者が文献の要約およびディスカッションのテーマ設定、司会などを行う。事前に担当者同士で内容についてよく話し合い、疑問点を整理し、理解を深めておくことになっている。今年度は「考える」ことを学ぶために、前期に池田晶子著『14 歳からの哲学 考えるための教科書』（トランスビュー、2003 年）を取り上げ、読み進めた。後期は理解をさらに深めるために、同じ著者の『14 歳の君へ どう考えどう生きるか』（毎日新聞社、2006 年）を 3 回にわたって講読した。本授業はその 3 回目（最終回）である。

本授業では『14 歳の君へ』から第 IV 章「どう考え どう生きるか 言葉・お金・幸福・人生」を取り上げた。3 名の担当者が文献の要約を行ったのち、ディスカッションにうつった。ディスカッションのテーマとして、「全 10 回の振り返り」および「『考える』とは何か？（考えること、悩むことの違いは何か）」の 2 点が担当者より提示された。

「全 10 回の振り返り」では、『14 歳からの哲学』『14 歳への君へ』の 2 冊の文献およびそれについてのディスカッションを通じての、それぞれの変化や気づきについて、受講生それぞれの言葉で語られた。「考える」とは何か、自ら主体的に「考える」とはどういうことか、ということにはじめて意識的に取り組んだことで、自己認識に変化があったようである。また、人前で話すことや、自分の意見を言うことが苦手であったが、そうしたことが少しずつできはじめた、と語る受講生もいた。自分について考えること、知ることは、心理臨床の重要な基礎であることが改めて共通に認識できた。また、そうしたディスカッションの中で、これから心理面接の事例を担当していくにあたっての不安も話題にあがった。

4 授業研究会（討議結果の概要）

参観者からは次のような意見が出された。

- ・学生の発言は、授業者の意図に沿ったものになっているのではないか。
- ・学生は文献の著者の意見を鵜呑みにしているのではないか。（著者の意見は偏っているように思われる。）

- ・学生の意見でユニークなものが少なかった。
- ・授業担当者が参観者に発言を求めたが、授業担当者が責任を持って答えるべきではないか。

これらの意見に対しては、授業者の意図やグループの経過（学生の課題や前期から成長してきた点など）について説明がなされた。また、授業者のグループへの関わり方について、参観者よりさまざまな示唆があった。

5 FDワークショップ要録（討議結果の概要）

この授業で取り上げる内容について、臨床実践を学んでいくための基礎づくりは確かに重要であるが、2年間という短い時間の中では専門的な学習を優先すべきではないか、という意見があった。

この意見を受けて、基礎が十分にできておらず、コミュニケーション能力も未熟なまま入学してくる学生が増えていること、基礎なしには専門的な学びが難しいことなど、学生の現状と、必要とされる学びのあり方についてディスカッションがなされた。



【特別支援教育専攻】

1 特別公開授業名 教育実践フィールド研究

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成26年10月15日(水) 第4時限・B104教室・田中 淳一, 津田 芳見, 島田 恭仁, 大谷 博俊
・14名・8名(担当教員を含)

3 授業概要

(1) 司会の田中先生より, 本時の授業内容について次のような説明がある。下記①～④の内容について各研究協力校(以下協力校)内で話し合いを持ち発表(10分)する。その後, 質疑応答の時間を設ける。

- ① どのようなことをしているのか
- ② 現在問題となっていること
- ③ それに対する対策
- ④ どのような効果がありその要因として考えられること

(2) 各協力校の発表

① K小学校(参加者3人)

3人のテーマは「通級指導教室における学習支援」, 「情緒学級での既習事項の確認と学習方略の獲得」, 「知的学級での日常生活に使われる語彙習得を目指した国語指導」である。課題としては, 児童の検査結果の読み取りが不十分でその活用ができなかったことと, 担任からの聞き取りの機会が少なく結果として実態把握が不十分であったことの2点である。

② N小学校(参加者3人)

教員の指導補助が主な業務であった。課題は, 担任との情報交換の機会が少なく児童の実態把握が不十分であったことである。要望として, 今後は協力校との事前打ち合わせで本授業のねらい等を協力校側にしっかりと伝えていただきたい。

③ H小学校(参加者2人)

テーマは「多様な子どもたちが安心して暮らせる学校」であった。親離れができず甘えてくる児童がいたが, その行為をどのように切り離していくか自分自身に葛藤があった。また, よく話しかけてくる児童とのけじめの付け方が難しかった。本授業の受講生以外にボランティアで院生が協力校に来ていたが, 仕事内容はほとんど一緒に受講生が研究ができる環境ではなかった。

④ 支援学校(参加者6人)

6人のテーマは「国語・算数の指導内容に対応して教材づくり」, 「就労体験を通じた就労意識を育てる指導」, 「一人ひとりに応じた教材づくり」, 「自立活動について」, 「ICT機器を活用した指導」, 「自立活動に使用できる教材づくり」である。6人が連携することなく研究を進めたので, それぞれの共通点を見つけて本研究の意味を探るのが今後の課題である。

(3) 質疑・応答等

- ・各受講生が作成した教材等を紹介するシステムを制作してもらいたい。
- ・受講生からのアイデア等により授業は改善することも可能なので提案していただきたい。

4 授業研究会要録（討議結果の概要）

司会：高原先生

(1) 授業者からの趣旨説明（田中先生）

現場に出て研究を行い、そして実践力を身に付けるのが本授業の目的である。今日の学生の発表から授業に対して満足していない学生がいると感じた。また、ストレートマスターは現職教員に比べ現場に対して新鮮さや目新しさを感じていたようだ。

(2) 意見交換

① 学生からのボランティアという発言について

学生の本授業への働きかけの違いによって(指示待ち等)受け取り方に差があるようでボランティアという言葉が悪い意味で使用されていた。しかし、学生側から授業改善に対する意見が出てきたのはよかったのではないかと。

ボランティアを悪いイメージで使う受講生がいる。教えてもらうのが授業と考え、具体的な指示がないため何をしたいのか分からない、そのような気持ちがボランティアという言葉に凝縮されているのではないかと。学校現場の大変さやこういったところが大変なのをまずは知ってもらうために本授業がある。自発的な意志によるボランティアならもっと積極的に学校に入りやるべきだろうと言いたい。何をすればいいのかわからず辛いのならそれをそのままの言葉で発言すべきで、指導の先生にもそのことを相談し進めていけば大丈夫だと思う。

授業を通して研究になりにくいという意見があったが、今後の授業の在り方について検討する必要があるのではないかと。

② 4校からの発表について

最近小・中学校に肢体不自由の支援学級が増えてきており、様々な障害の子どもが通常学級で過ごすことが多くなっている現実やそれに対応した学校の前向きな環境整備等の取り組みを学び取ってもらえたと思う。4校による中間的な報告会が開催されたのはよかったと思う。

③ 授業改善

今までの学習歴の差があるため、ストレートマスターにはこちらから一定の枠組みを示した方がよいのかもしれない。各校ごとで反省会や毎月の報告書の提出は継続している。4月の発表校は固定化しているので、受講生自身でどの校が発表するか話し合っただけではどうか。割り当てられて配属先が決まるのではなく、各学校からのテーマを受講生が見て配属校を決定できるような具体性のあるテーマの募集にしてはどうか。受講生の反応を授業に組み入れられる力と余裕が必要だろう。すべてを教員がお膳立てするのは指導力を発揮しているようだが受講生の力の定着にはつながっていないかもしれない。受講生からは受講者だけがアクセスできるライブキャンパスのフォーラムの機能を使って意見交換をしてはどうかという意見があった。しかし、書き込みにはモラルが必要で顔の見えないところで意見を述べるのはいかがなものか。授業でも書かせると記入するが発表はしない。

④ 授業担当者の感想

担当小学校には、現在の特別支援教育が抱える課題がたくさんあり、受講生は勉強になったと思う。現場では現職教員が研究に行くことが喜ばれ注文されることが多くなるが、協力校には本授業の目的を説明し、納得してもらっている。学生との距離感がつかめてよかった。指導と自主性をどう引き出すかが難しい授業だと感じており、他校の意見を聞くことができたので学生との距離のとり方が少し見えてきた。授業を担当された先生方から、今までの指導方法を教えていただくと有り難い。多くの受講生が様々な意見を述べ聞くことができる機会は大切なことだと思う。

【言語系コース（国語）】

1 特別公開授業名 国語科授業演習

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成26年10月16日(木) 第2時限・B303教室・幾田 伸司・6名・5名

3 授業概要

3.1. 授業目的・趣旨

本授業では、戦後の優れた国語科授業実践の実際を取り上げ、その背後にある思潮や実践の原理と方法を探求する。また、このような探求によって明らかになった教育観・授業観を検討することを通して、現代の国語教育実践を考察する手がかりを得る。

3.2. 到達目標

- ・戦後の優れた授業実践を対象として、その思想、実践原理、方法論を分析することができる。
- ・分析した内容を的確に報告することができる。
- ・先行実践から、現代の授業を検討する際に生かせる視座を得ることができる。

3.3. 本時の位置づけ

＜本時の目標＞

「語り手はなぜ『ごんぎつね』の物語を語ったのか」という学習課題を設定した授業を構想するための、物語教材の教材分析を行うことができる。

＜本時の展開＞

- ① 前時をふり返り、登場人物の変容を軸とした物語教材の構造を確認する。
- ② それぞれの疑問点をもとに、物語教材の教材分析を二つのグループで行う。
- ③ 分析結果を交流し、教材の読みの可能性を全体で検討する。

4 授業研究会要録

- ・日 時：平成26年10月16日(木) 第5時限
- ・場 所：国語ゼミナール室
- ・参加者：6名
- ・分 担：黒田（司会）、幾田（授業説明）、田中（記録）

＜公開授業の解説（授業者より）＞

- ・前期から継続してグループワークでの「教材研究・分析」を行っているため、受講者たちはこうした活動に慣れている。
- ・受講者には、授業全体を見渡すことを意識させている。
- ・受講者たちが自分たちで何かを見つけること、その方法を習得することを重視しているため、授業者は、授業中、受講者の読みにあまり口を挟まないスタンスを取っている。ただし、授業者の読みは討議の間、または討議のまとめで示すこともある。

- ・本授業の今年度の受講者は半数の3名が現職の教員なので、高いレベルでの教材解釈はできており、グループワークの主導も行ってくれるのでスムーズに作業が進行する。ストレート進学を受講者だけなら、展開が違っていった可能性が高い。

<協議>

○「変容」について

- ・本授業では、「人物の変化」($X \rightarrow X'$)という点を物語教材の基本構造とし、このコンセプトにいったん乗った上で、教材の読みを受講者に自由に考えさせるという授業進行を行っていた。自分は「ごんの立場で読む」という捉え方で「ごんぎつね」を読んできたので、「変容を捉える」という点から物語の構造を捉える物語教材観は、新鮮でおもしろかった。

○受講者の取り組みについて

- ・受講者を2つのグループに分けて作業させていたが、対照的で面白かった。
A班：役割分担をし、黙々と作業していた。個人の作業・考えの足し算がグループ全体の作業・考えとなっていた。
B班：全体で活動しており、一人の問いがグループ全体の問いになっていた。
グループ活動としてより生き生きとしていたのはB班だったように思う。
- ・グループワークの進め方については特に指示はしていない。グループワークはメンバーのキャラクターが出るので、固定した方法にはなっていないようだ。学部3年生でも同じスタイルの授業を行っているが、一般的にはB班のような活動スタイルが多いようだ。
- ・前期には120分ほどかかっていた活動が、今では40分ほどでできるようになっている。その理由として、最初は「いったん項目を挙げ、その後で分類する」という2段階の作業を行うことが多かったが、今では具体的な疑問点を考えながらそれがどのレベルの問いになるか考えられるようになってきたことが挙げられる。言い換えれば、最初から見通しを持って問いを立てられるようになったので、問いの精選があらかじめできるようになったということだ。

5 FD ワークショップ要録

<授業者より>

- ・今回の授業では、まずは「テキストを使うこと」を目指した。作成したテキストは学部一年生用に設定してはいるが、盛り込んだ内容は授業や学習を意識した教材観に基づいており、国語科授業についてのイメージが固まっていない一年生には難しすぎる懸念もある。そこで、いきなり学部生を相手にテキストを使って授業を行うのではなく、意識が高く現場のことを分かっている大学院生を相手にパイロットとしてこのテキストを使用し、執筆者の意図がどこまで伝わるか、課題はどこにあるかを検証してみた。

<協議>

- ・現行のテキストは読み物としてはおもしろいが、その分情報量が多く、15回の授業ですべてをカバーするのは難しい。今回の授業でも、教材解釈に慣れている大学院生でも、1時間分として設定されている内容に2時間かけている。今のテキストを授業で使うなら内容をかいつまんでいくしかないが、そうすると本質的な授業観・教材観や分析方法といった、学生に習得させたい本質的な学習内容がお

ざなりになる懸念が大きい。授業に使いやすいテキストに改善するとき、ここから何を足し、何を削るかが今後の課題となる。

- ・現時点では「読み物」という位置づけになっているのはその通りだと思う。テキストだから授業で使わなければならないということを意識しすぎて内容を薄くするよりは、これくらいのレベルの内容を確保した方がよいと思う。
- ・小学校用のテキストであるなら、古典文学の項目はいらないのではないかという意見も考えられる。しかし、「伝統的な言語文化」の学習が学習指導要領に明文化されており、学生にとっても4年間を通して学ぶべき国語科の内容として重要性が高いことを考えれば、古典文学に対する素養は小学校教員にも必須であろう。

【言語系コース（英語）】

1 特別公開授業名 英米文学研究 I

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成 26 年 10 月 21 日(火) 第 4 時限・B 306 教室・杉浦 裕子・6 名・5 名

3 授業概要

文学作品を読みその内容を考察する授業は「英米文学研究Ⅱ」で行うため、「英米文学研究Ⅰ」の授業では、演劇を取り上げ、台詞の練習を通して学生の会話力アップも見込んだ授業を行っている。劇の内容をディスカッションするのではなく、台詞に込められた思いや感情、どういう狙いで幕切れにするのかなどを話し合ったりする。台詞の練習を毎回 10 分取り入れ、文字で書かれたものを発話して文字と感情をリンクさせることが一番の目的である。

4 授業研究会要録

感想：イギリスの演劇の使用は重要な意味を持っている。イギリス英語にはスラングがありそれが良い。

ことばの裏にある感情をくみ取り、声色や体を使って表現することも学ぶことができるので、演劇を使った授業は大変興味深く良かったと思う。

質問：この劇には CD はないのか？

回答：CD はないが、学生は youtube 等によく探してくる。以前やった劇は映画があったので先に見せた。

質問：小説ではなく、劇にされたのはどのような理由か？

回答：劇を実際に演じてみることで、体、心、気持ち、声を一体化させることを経験させ、彼らが教員になったときに役に立つことを望んでいる。教育の中でも劇を取り入れる事に大きな意義がある。文学の授業はこの「英米文学研究Ⅰ・Ⅱ」が唯一で、Ⅱでは文学を読ませるため、自分はⅠで劇をやる。ト書きを読んで正確に場面を読み取る必要があるため、英語を理解するための訓練にもなる。

質問：「英文講読」との関連は？

回答：「英文講読」では題材に文学を使うが、内容は精読である。共通点は予習で和訳させることである。本授業での和訳では、その場の雰囲気をつかんで訳せるかを見ている。週を追うごとに彼らの和訳が進化してくる。

質問：直訳している学生がいなかったが、どのように工夫しているのか？

回答：授業が進むうちに、場面に適した言葉が浮かんでくるようになり、ジェンダーや年齢を考慮した訳をすることができるようになる。予習プリントは、ヒント、道しるべとして毎回、訳の担当者だけでなく全員に配っている。この部分も平常点に加えている。

読むだけの授業のときは寝る学生もいたが、台詞を読ませたり期末テストを演じさせることにしたことで、学生が積極的に授業に参加するようになった。

質問：ページ数は？

回答：100 ページくらい。最後の2週は上演練習に充て、期末テストで上演する。

質問：評価は？

回答：難しい。集団での評価が難しい。台詞を間違ったとか忘れたとかは減点対象にせず、過程をみているのでほぼ努力点。毎週頑張っているから悪い点はつけない。ビデオを撮り、次の年の学生にみせる。7ページほどの上演テスト部分は暗記させている。

質問：ビデオはないのか？

回答：Black Comedy にはない。劇団四季がやっていた。

質問：Black Comedy の由来を学生にはなしていないのか？

回答：まだ話していない。Black は停電のこと。人間の愚かしさをきつい風刺劇ではなく、愚かな人間はかわいいよね、みたいな・・・。

質問：学生も台詞をとおして感情をくみ取るのは難しいと思うが、先生からの声かけで雰囲気くみ取らせる工夫をしているのか？

回答：最初はこちらから説明を補充してあげて、つかめていない子の補助をしている。

5 FD ワークショップ要録

- ・教育実践力を培う授業の在り方について

授業者：学生には、行間から想像して訳してほしいが、全体の読み取りが下手なのでそこを訓練し、英語に関する全体的な力をつけてほしいと思う。予習や単語を調べては来るが、想像しながら全体を考えて訳する総合的な英語の力につなげてほしい。将来教員としての英語力をつけるために、現代劇を読んでいる。

参観者1：最後に自分で演じることで、気持ちを込めて英語を発することに関連するのでは。

参観者2：劇をやるのはいいのではないか。英語教育ではきちんと情報を読み取ることが重要であるが、それ以外にも学生は多様な英語を読むことが大切である。教員は役者であるので、演じるための英語の力も必要であろう。

- ・「小学校英語教育論」のテキストについて

今のままでは出版しない。著作権の問題もある。100名以上を相手に音声学を指導するのは難しい。紙質のせいか鉛筆でメモが取りにくそうだった。今年度授業を行ってみて、内容を取捨選択する必要が出てきた。将来実際に小学校で英語の授業をすることを想定すると、クラスルームイングリッシュを入れた方が良いと思われる。

【社会系コース】

1 特別公開授業名 地理学概論

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成 26 年 10 月 15 日(水) 第 2 時限・B 205 教室・畠山 輝雄・37 名・9 名

3 授業概要（授業のねらい・内容・方法・学生の反応等）

本授業は、1 年生配当科目並びに社会科免許における必修科目である地理学概論の 2 回目である。1 回目には、「地理学とは何か」について講義した。その中で、「地理学は地域差や地域性を明らかにする学問」との説明を行い、「地域」という用語の重要性を述べたため、2 回目の授業では「地域の概念」について具体的な事例を用いながら解説した。特に、学生が地理の授業をする際の、「地域」の見方について理解させることをねらいとして、「地域の種類（形式地域、実質地域（等質地域・機能地域）」と「地域のスケール」という 2 つのテーマを重点的に解説した。

授業の方法は、講義の流れを示したレジュメと図表類を示したパワーポイントの打出しの配布、ならびにパワーポイントのスクリーンへの投影による学生への解説の共有化である。レジュメは、重要な箇所は空白にしておき、黒板に板書したものを記入させる方式である。パワーポイントの打出しの配布については、スクリーンに投影した図表類への解説内容や、学生自身が感じたことをメモさせるために行っている。地理（学）では、地図を用いた空間的視点での考察や、地域差の理解が重要であることから地図を多用し、特に本授業ではさまざまな空間スケールの地図を用いることで、授業実践において説明したい地理的事象によって地図のスケールや地図に記載する内容を考える重要性を説いた。また、授業では、教員が一方向的に解説するのではなく、学生との対話の中で考えさせることにも重点を置いている。

本授業の受講生は、高校で地理を受講したものがわずかであり、地理（学）に対して苦手意識を持つものも少なくない。このため、徳島県や鳴門市などの身近な事例を用いながら解説することで、学生の発言も多く得られたし、寝ている学生もおらず、反応も良かったように感じた。全般的な理解度について、今後の授業内での小テスト等で図っていききたい。

（文責：授業担当 畠山輝雄）

4 授業研究会要録

畠山実践についてのコースの合評会を通じて、以下のような意見を確認した。

- ① 教員養成大学においては、教科専門科目は質・量ともに薄くなりがちである。そうした中で、教員養成の目的をふまえながら、教員がこれだけは伝えたいという基礎・基本にあたる教育内容を明確にして授業に臨むことが大切である。本授業では、スケールと目的に応じた地図の機能と地図に内在するバイアス（情報として何を残し、何を消すかに関する価値的判断）を理解することが内容となっており、示唆に富んだ授業であった。
- ② 学習プリントの構成とそれにもとづく授業展開は、地図の種類と機能に関する一般的・概念的な知

識をまず教え、その事例研究として各種スケールや機能をもった地図を具体的に検討するという、いわば演繹的な思考に沿うものであった。必ずしも、概念的な知識を事例に応用するという学びは成立していなかったのではないか。学生、特に1年次生を中心とする受講者の構成からすると、具体的な地図に即して事実と特色を学生自身に引き出させ、それらを概括するように一般的・概念的な知識をまとめ習得させる、いわば帰納的な思考に沿う授業展開の方がよかったのではないか。

- ③ 教科専門科目のうち、特に概論の授業では、教材の集め方や資料加工の技能、さらに教材の収集・資料の加工の過程に内在するバイアスについて習得させる内容を位置づけること、すなわち方法知を内容化することが大切である。
- ④ 学生への配布資料やPPTの鮮明さや読みやすさに配慮する必要がある。そのことは、受講生が教員になり、児童生徒のために教材を作る場合にも重要な観点となる。
- ⑤ シラバスにおける「学修課題」をふまえ、15回の授業の中で、レクチャー（問答法を含む）とアクティブ・ラーニングをどうバランスよく組み込んでいくのかを考慮した授業計画の立案が今後一層求められる。
- ⑥ 学生のモチベーションや適度な緊張感を保持するための指名の仕方や作業課題の与え方を工夫する必要がある。

5 FD ワークショップ要録

本コースでは、カリキュラムマップに基づくコース開設授業の体系について意見交換した。意見の概要は、以下の通りである。

- ① コア科目における教科専門教員担当の内容と教科専門科目の内容との体系や整合性をどう図るかが課題である。
- ② 授業や受講者の実態に照らすと、現在のカリキュラムマップに描かれているような授業と授業が単線的につながっていくようには必ずしもなっていない。学部授業において長期履修プログラム院生の受講者も多く、彼らに不都合が出来るだけ生じないように授業内容を臨機応変に改変している実態がある。理念・理想を示すマップの構成と実態とのギャップをどう考えるのか、課題が残る。
- ③ 学生に「自ら学ぶ姿勢を涵養する」という観点からすると、大学側がマップ等のツールによりカリキュラムの中味を説明しすぎると、「能動的な学修」ではなく、「受け身の学習」を結果的に促してしまうことにならないか。授業の選択について学生が責任をもち、学生自身がその授業の位置や意義を見いだしていくことこそ大切である。

(文責：司会者 梅津正美)

【自然系コース（数学）】

1 特別公開授業名 幾何学Ⅱ

2. 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成 26 年 10 月 15 日(水) 第 2 時限・B 105 教室・松岡 隆・9 名・4 名

3 授業概要

まず、最初に小テストとして直角三角形の合同条件に関する問題を出題し、学生に解かし、提出後簡単な解説を行った。続いて、本時の本論に移った。ここでは、中学校において学習する初等幾何学における合同条件を話題の出発点とし、数学における論証、証明の意味を明確にし、論理の構造を明らかにした。特に三角形の内角の和が 180° になることを例に挙げ、その根拠を次々と段階的に表し、最終的に根拠を持って示せなくなる段階に至ることを説明した。この最終段階における事実は公理と呼び、真であると約束するとの解説であった。さらに古代ギリシアの数学であるユークリッド原論を紹介し、現在の中学高校教科書の内容がこれに基づいていることの説明があった。続いて中学・高校の平面幾何のそれぞれの内容及びそれぞれの根拠となる内容の関係を矢印で表した図表を与え、なにが公理に当たるのか学生に考えさせた。また、ユークリッド原論の公理、公準に基づく公理体系は非常に厳密に構成されているものではあるが、それでもなお欠陥があることの紹介も行われた。例えば、正三角形の作図可能性において公理からは導き出せない事柄が含まれていることを指摘し、学生にそれが何なのか考えさせた。引き続き、活動として四角形の合同条件についてどのような条件が考えられるか学生に考えさせ、幾つかの十分な条件に対して証明させたり、不十分な条件に対しては反例を考えさせ発表させる等の活動を行った。

4 授業研究会

まず、授業者より幾何学Ⅱに対して以下の説明があった。授業内容については前半はユークリッド幾何、後半は射影幾何を行うことになっている。そのうち本時は 2 回目の授業である。目的は中学・高校の幾何の全体構造を理解させることにある。特に当たり前のことを証明しているということについて考えさせる。授業の進め方については、まず学生に発言させることを方針としているが、この学年は反応が少ない学年であり、発言が少ないためこちらから指名して授業を進めていっている。また、反応も少なく、今回においても板書をもう少しきっちり書いた方が良かったかもしれない。小テストは毎回行っているが、問題を宿題として提出し、次回にその内容をテストとして行っている。まず内容を決めて提示しているため、学生は自ら復習、調査を行っており、このことが課外での勉強を促進していると評価できる。ただ、毎回小テストの時間を確保しなければならず、それに時間が食われるという問題はある。

以上の説明の後、以下の通り、本 F D ワークショップへの参加者から質問、提案、議論等が行われた。

- ・本講義においては中学教科書を利用し、それを理解することが重要であることを強調しているが、学生側の理解、受け止め方が不十分ということはないだろうか。
- ・このことに対しては確かに不安である。優秀な学生は十分にその意図を理解していると思われるが、

他の学生についてはその理解度に問題があることが懸念される。

- ・その意識付けをどうすれば良いかが問題である。
- ・小テストを行っているが、テスト結果を見て判断できるのはその解答が正しくなされているかどうかまでであり、本当にこちらの意図する内容理解まで至っているかどうかチェックするのは難しい。
- ・細かく、正確な模範解答を書くことができることを要求しているのではなく、証明の発想や基本的なアイデアが重要である。そのキーポイントとなるところを押さえておけば、ある意味細かい表現等は気に掛ける必要はない。それらのキーポイントがどこにあるのかがよく分かっていない。これは、試験において、内容を理解することよりも完全な解答を書かなければならないということを優先させている高校までの学校教育の指導方針の弊害かもしれない。
- ・本学の学生が忙しすぎるということが影響を及ぼしているという点もあるのではないか。演習の時間が少ないため、学生の理解度の把握やそれに基づく細かい指導にまで至らない。
- ・幾何学においては、ほとんど「演習」に近い授業を行っている。
- ・演習を行えば学生自らが理解できているかどうか気づくこともあるし、こちらも理解度に対して十分に把握できるというメリットはあるが、一部の学生のみが積極的に参加し、その他は置いてきぼり、ということにはならないか。また、時間的な問題もある。
- ・幾何学の授業では特に長期履修生が「演習」を引っ張ってくれており、それに他の学生もついてきている。また、代数、解析分野と異なり、幾何学については、いわゆる積み上げではないためやりやすい。

5 FDワークショップ要録

今回、小学校教科専門科目テキスト使用の授業科目「算数」は既に前期において終了していたため「幾何学Ⅱ」の公開授業を行ったが、実際に前期「算数」で当テキストを使った授業者からの授業に対する印象や課題を説明してもらい、そのことと、公開授業も含め他の授業で感じている各教員の課題を照らし合わせて、それらの解決への方向の議論を行った。出された意見や議論はおおむね以下の通りであった。

- ・小・中・高等学校で学んだ算数・数学が実際の算数の授業とどう関わっているのかをテーマとして「算数」を使った授業を行った。算数を教えるのになぜ数学が必要なのか、現職の教員からは目から鱗との意見であった。これは「算数」の内容を自らの指導と結びつけて考えた結果だと思われる。数学が得意で無かった学生は特にいい見通しが立ってきているようである。一方で、数学科の学生は、この程度のことはよく知っているからという意識を持っていてよく聞こうとしない。表面だけ見ても、その奥にある深い内容まで踏み込んで考えることがない。算数の問題が解けるからそれでいいのだという意識がある。長期履修生の方が知らないが故に、逆に良く話を聞いている。教師として生徒・児童を指導していくためには、その内容を深く理解し、その立場から指導や教材開発等を工夫しなければならない、ということが理解できていない。単に教科書にあることが分かれば指導できると思っている。
- ・教科書の内容をよく理解し、解説できることが大事である。そのためには教科書に書かれているものを分かるだけでは不十分である。
- ・その問題に対しては、教科書に書かれている内容の中にある不十分なところを指摘し、ただ問題が解けるだけではだめであると認識させることが重要である。

- ・1年生の最初の段階において、更に先の数学を理解していないと、学校において教科書の指導ができないと悟らせる機会を設ける必要がある。
- ・同じことであるが、1年生に入った早い段階で学ばなければならないことや、必要とすることを理解させる必要がある。
- ・そのためには教科書を授業に取り入れ、大学数学との関係性をその都度指摘することが必要である。
- ・授業で言ったことはその通り答えることができるが、それを少し変えた問いについては非常に易しいことについても答えられない。機械的に覚えておくことはできるが、応用力がついていない。発想が重要で、簡単なことでもやたら式を立てて細かく書くという単に記憶のみの姿勢は止めなければならない。テストでは一字一句違わない解答を書くが、そのことは内容を理解できていないことの裏返しである。
- ・自分たちが実は分かっていないということを学生に分からせることが必要である。

以上、課題について多くの意見が出されたが、その内容はすべて数学の内容に対する本質的な理解の不足をつくものであると思われる。一方で、その解決に向けて幾つかの提案はなされたものの、決定的と思われるものはなかなか難しい。これを機会に今後更に意見を交わしながらこの課題に取り組んでいく必要を感じた。

【自然系コース（理科）】

1 特別公開授業名 化学Ⅱ

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

公開授業 平成26年10月16日(木) 第4時限 授業研究会・FDワークショップ 同日 第5時限・理科授業過程実験室（自然棟4階）・胸組 虎胤（自然系コース（理科）教授）・10名（当日出席者10名）・3名

3 公開授業の概要

自然系コース（理科）では、化学分野の内容に関する科目として、「化学の基礎」「中等理科（化学分野）」（以上各1単位）「化学Ⅰ～Ⅲ」（各2単位）の合計8単位と実験科目の「化学実験Ⅰ，Ⅱ」が開設されている。今回特別公開された「化学Ⅱ」は、3年次を標準履修年次とする教科に関する専門科目であり、中学校教員養成課程理科教育コースの必修科目、小学校教員養成課程理科コースの選択必修科目である。授業の目的は、化学分野のうち、主に有機化学の内容について専門的立場から解説することである。

公開授業では、有機化学を「矢印」「命名法」「立体」という観点から理解することが大切であるとの説明があった。「矢印」というのは、化学反応式などで意味の異なる数種類の矢印が現れること、「命名法」とは多様な物質にいかにして unique な名前を付けるかということ、「立体」は平面表示では理解の難しい立体構造をイメージすることである。このような視点は、同じく化学を専門とする記録者にとっても斬新であり、大変参考になるものであった。授業では、それに引き続いて酸・塩基の定義とその強さをどのように決めるのかについて復習し、有機化合物命名法の基礎的な解説をされた。英語での命名規則が基本であり、適宜例題を出題することで、学生の注意を集めることに腐心しておられるのが見て取れた。また、語り口や授業の進め方も大変丁寧で、（一部寝ている学生を除けば）ついて行けていない学生はいなかったであろう。

4 授業研究会の概要

授業研究会およびその後のワークショップは、参観者、授業者に加えて、授業に出席していた学生1名の参加があり、コーヒー・お茶菓子を手にリラックスした雰囲気で行われた。研究会では、授業者から内容について概要説明があったあと、参観者からの質疑応答を行った。

最初に、教科書採用について「教科書を使うメリットは何か」について質問があった。授業者からは、「教科書は受講者（ほぼ）全員が購入している。専門的な書籍を所有することは、後々（卒業後）学生時代に受けた授業を見返す必要が出たときに参照できることが大きなメリットである」という回答があった。さらに「授業では、適宜掲載されている物性値の表などを参照できることや、章末に示された演習問題などを利用している」とのことであった。別の参観者から「教科書指定のメリットはよく分かる。しかしながら、自分の授業内容に合致するような教科書がなかなか見当たらない。どのようにして教科書を選定しているか」という質問があった。授業者からは「自分の専門分野に近い人が書いた教科書な

ので、この授業にマッチしやすい」という回答があった。授業では、使用しているプレゼンテーション資料を配付しておられた。受講者からは「学習には、配布されている資料と教科書の両方を活用している」というコメントがあった。別の参観者からは、「数式が多数現れる科目では、授業中は教科書に載っている部分は省略して式を提示するだけですませることが多い。教科書でその導出過程を学ばなくては理解できるようにはならないだろう。」というコメントがあった。

続いて参観者から、「この授業で必要としている既得概念はどのようなものか」との質問があり、授業者からは「原子内の電子の軌道や、混成軌道による分子構造の理解などが必要であろう。これらは、2年次で受ける『化学I』で教えている」との回答があった。さらに「本授業で取り上げている有機化学は『矢印』『命名法』『立体』で表現される内容を理解できれば、あとは各論になると考えている」とのことであった。

引き続き参加者から高校化学教科書の記述との、内容の整合性について質問があった。特に物理量の単位の扱いについては、現在は高校化学でも、国際単位系が使用されている旨の回答があった。さらに、授業で取り扱った、強酸・弱酸の区別と酸・塩基の強弱の関係についての質問があり、酸・塩基の定義に依存するという回答があった。また今回の授業ではあつかつていないが、「分子の立体構造は有機化合物を理解する上で重要であろうが、受講者たちが理解できるようにする方策はあるか」との問いがあった。これに対し「実習の授業で、分子モデルやパソコンソフトを用いて立体構造を見る機会を与えている。ある程度イメージできているのではないか」という回答があった。これに対し「手で実際につくるという作業だけではなく、抽象的なままで理解できるようになっている必要があるのではないか」との意見があり、「イメージなく理解を進めるのが困難で、有機化学ではそういうアプローチはあまり一般的ではない」という回答があった。

5 FD ワークショップの概要

「よい教師を育てる授業」についての意見交換

最初に「教師を育てるのであれば、まず教科内容の基礎を徹底的に身につけさせ、そのあとで教育論や実習に入るのが筋ではないか。教科内容の理解なしに最初から何かを実践しようとしてもどだい無理がある。その意味で、大学全体として教師教育カリキュラムの体をなしていない。」との意見があった。筆者もほぼ同意見であるが、これに対し、受講者として参加していた学生からは、「学生の勉学に対するモチベーションを維持するためには、子ども理解→教科内容→教育方法と進む方がいいのではないか」との意見があり、「1年次生の時間割が空きすぎていることも、学生がモチベーションを維持できない理由の一つと思う」と付け加えた。筆者は、大学側の基本的なアイデアとしては、むしろ大学生活に慣れることができるよう、入学当初から時間割の余裕がない状況をできるだけつくらないようにしているものと理解しているが、これが学生の感覚とずれているのかもしれない。また教員からは、「高校理科と大学で学ぶ自然科学の違いが大きく、ついて行けていない。結果、高校+ α 程度の知識しかついてない」などの意見があった。

全体として、例年同様「教育実践が前面に押し出され過ぎて、教科内容の理解に結びついていない」との意見が多かったが、1年次の時間割を見直すことは可能であり、必要でもあらうと考えられる。

(文責：武田 清)

【芸術系コース（音楽）】

平成 26 年 10 月 17 日(金) 第 3 時限

司会：頃安利秀

1 特別公開授業名 初等音楽 I

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成 26 年 10 月 17 日(金) 第 1 時限・D 201 教室・松岡 貴史・56 名（出席者）・5 名（教員）

3 授業概要

＜音楽理論と創作＞ テキスト『初等音楽 I』の pp.3 - 5 該当部分

音楽理論は扱うのは今回 2 回目であり、前回は「音」に関する側面を、今回は「時間」に関する側面を取り上げた。拍と拍子について、まず日常生活の具体的な場면을例に挙げながら学生たちに拍節感をつかませたうえで、リズムの記譜指導を行った。そのうえで、「音」と「時間」に関する内容を総合させて、わらべうたを創作する活動を行った。

4 授業研究会要録

① 授業者による授業の目的と意図の説明

本授業の目的と意図は、拍節構造の意味を、単なる音楽の理論としてではなく、生身の生きている人間が拍節感を感じるということはどういうことかという視点から理解させること、そのうえで、リズムの書き方、読み方を学習させ、創作意欲へとつなげることにあった。

方法として意識したことは、音感、リズム感などの「感覚」と「楽譜の読み書き」をリンクさせながら、音楽理論を理解させることである。

② 授業者による所感

ここ数年、同様の内容とスタイルでこの授業を行っている。その中で実感することは、拍節感について動作、言葉、呼吸と関連させて話すと、学生の食いつきがよいことである。時間の芸術である音楽と、人間が生きることとの関連を考えるよい機会になっている手応えがある。

一方、課題に感じることは、授業内の時間配分である。毎回の授業において、学生が集中する瞬間や少しだれている瞬間に臨機応変に対応しながら、学習活動の時間配分を行う必要がある。

授業の成果を本当の意味でみとれるのは、後日提出を課したレポート課題（わらべうたの創作）の成果。昨年のレポート課題では、9 割以上の学生がよく理解しており、5 音階によるわらべうたの創作のとりくみややすさを実感している。

③ 授業についての討議（授業者からの回答は→で示す）

○初等音楽 I の内容について

- ・拍や拍の流れに関することは、初等音楽 I では必ず学生に身につけてほしい内容。しかしながら、多くの大学では拍の根本を教えていないのではないか。その点において、拍を根本から教える今

日の授業は、あるべき初等音楽Ⅰの道を開く授業だった。

- ・教師になるために必要な内容だけでなく、子どもたちが自分で音楽の世界を切り拓いていくための起爆剤になるような内容を大事にしたい（授業者）。

○拍節構造の指導について

- ・リズムを書き取らせる活動があったが、いきなり記譜させるのではなく、まずリズムを歌えるようになってから書き取らせると、よりスムーズだったのではないか。
→次回にそのように実践してみたい。
- ・日本語のもっている言葉から拍節構造を感じ取らせたいうえで、リズム（音符）の学習につなげればよかったのでは。
→日本語のリズムは変拍子になるため、そこから西洋のリズムにつなげる難しさを感じている。
- ・教師が歌い、学生が模倣するという教え方が効果的なのでは。たとえばドイツ等では、筆記聴音は少ない。フィンランドでは、教育の成果として小節ごとに模倣することが可能な子どもが育っている。
- ・拍節感の授業から、創作へのつながりが学生にとってむずかしかったのでは。
→楽典やソルフェージュの内容と創作との結び付きにくさを感じている。今日の授業では、両者は記譜の要素においてつながってはいるが、作曲する意味という点はまだ稀薄であると感じている。

○音楽理論と実践の結びつきについて

- ・音楽理論を身体で実感することが大切。そのために、学校で使われている歌曲や、誰でも知っている歌曲など、学生にとって身近な歌曲を使うとより効果的であったのではないか。
→テキストでは、「うみ」を使って説明している。
- ・授業内で使用された音楽用語を、学生たちは実感として理解していたのか？
→前回の授業で説明しているが、1回の授業では実感までいくことは難しい。
- ・初等音楽Ⅰの15回の授業において、先に実技を体験する授業をおくと、学生たちが音楽理論を実感できるのではないか。
- ・拍のもつ加速・減速の性質について、ジェットコースター、握手の例などを用いて説明したことが興味深かった。学生の実感につながったのでは。

○読譜指導の難しさについて

- ・楽譜を介在させなければ、かなり上手く歌うことができる。問題は、楽譜が読めないこと。
- ・「初等音楽Ⅰ」の授業で、「音楽力チェックシート」を用いて学生たちの実態を調査した結果、階名（移動ド唱法）の力がない学生がほとんど。
- ・教育現場では、読譜指導は専門教育だから必要ないという教師も多いことは問題である。
- ・吹奏楽などの経験があっても耳コピーで育ってくる学生が多い。

○大学の授業と高校の授業の相違について

- ・大学は、受験勉強に代表されるような高校の授業の延長線上にある授業ではない。今日の授業は、まさに「大学」の授業であった。その点で、学生がむずかしさを感じている（距離を感じている）印象を受けたものの、高校の勉強と大学の勉強との違いを学ばせるよいハビリになったと思う。

5 FD ワークショップ要録

① よい教師を育てる授業とは

(ア) 「よい教師」とは

- ・実践と理論が自分のなかで結びついている教師
- ・自ら学び続ける教師
- ・音楽科の必要性を認識し、音楽を通して教師としての使命感を抱くこと

(イ) 「よい教師」を育てるためにはどのような授業が必要か

- ・授業研究会で話題になったように、理論と実践を結びつける授業が教師としての力量形成につながる。

② 教科専門科目テキストの課題について

- ・授業研究会で話題になったように、学生に親しみのある楽曲が具体例として入っているとさらによくなる。
- ・読み物としても楽しめるものにできればよい。
- ・テキストを実際の授業において使っているうちに、改善点がみえてくるであろう。

【芸術系コース（美術）】

1 特別公開授業名 「美術理論・美術史 I」（学部 2 年次必修科目）

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成 26 年 10 月 21 日(火) 第 4 時限・D 202 教室・小川 勝・学部 2 年 7 名（小倉・志摩・古川・山田・石井・田村・西尾） 大学院生 5 名（石田・栗田・東條・成合・馬越） 計 12 名・教員 5 名（野崎・山木・鈴木・内藤・栗原）

3 授業概要

冒頭・小川教員より本授業スケジュールについて伝達

今年度のテーマ「西洋近代美術」

第 1 回 バロック美術概観

第 2 回 ロココ美術概観

第 3 回（本時）ゴヤ：ロココから近代へ

フランシスコ・デ・ゴヤについて（1746 年サラゴサ～1828 年ボルドー）

第 4 回以降 ダヴィッド、アングル、ドラクロワなど



〈授業の進行〉

- 1, 18 世紀のロココ調を主な内容とすることを説明。
- 2, スライドによる, ゴヤ作品の投影による解説。

〈授業の内容〉

- 1, 18 世紀, ロココ調, 貴族社会, タペストリーについて
- 2, ゴヤ (1746～1828) について (経歴, 技量, 結婚, 社交性, 生活の確立など人物像)
- 3, 「マンサナレス川の岸辺のピクニック」1776 年 271×295cm プラド
- 4, 「パラソル」1777 年 104×152cm プラド
- 5, 「サンタ・クルス侯爵夫人の肖像」1792 年 142×97cm ルーヴル
- 6, 「アルバ公爵夫人の肖像」1797 年 210×149cm ニューヨーク・スペイン協会
- 7, 「理性が眠れば, 怪物が生まれる」1797～1799 年 ロス・カプリーチョス 第 43 図
- 8, 「カルロス 4 世の家族」1800 年 280×336cm プラド

9, 「裸のマハ」 1800年11月以前 97×190cm プラド

10, 「着衣のマハ」 1800～1803年 95×190cm プラド

4 ならびに 5 特別公開授業に係る授業研究会・FD ワークショップ（美術）

授業研究会 主テーマ「よい教師を育てる授業とは」

—カリキュラム全体を見通した授業改善—・—シラバスの内容を通じた授業改善—

平成 26 年 10 月 21 日(火) 第 5 時限・D202 教室

司会：鈴木 記録：栗原

授業者：小川 教員出席者：野崎, 内藤



最初に鈴木より授業研究会の流れの説明後、授業者による授業実施報告（以下より討議記録）
（学生はこの時間教員免許関係の授業に出なくてはならない為、参加者なし）

小川：授業目的、趣旨、シラバスでは知識の羅列は重視していない。受講者自身がどれだけ作品を自分の眼でみているかどうかということを中心としている授業だ。美術史というのは、美術の歴史というより美術の物語で、フランス語では物語と歴史は同じ意味を指している。美術史は研究ではなく物語をつくるもの。知識というものは得ようと思えば得られる。それ意外の見方ができなくなるのがいけなく最も避けるべき。妄想から出来上がった物語であっても、その作品から出発したプロセスとしてあり得るという立場でやっている。できるだけ知識は重視していない。作品の背景を知ったうえでないといけないという意見もあるが、教室で子供たちが作る作品を（作者が誰であっても）、作品の魅力を見ることができるか。教師が教師なりに作品に現れている力を見つける力を養いたい。そのような理由で板書ではなく、実物投影機とプロジェクターで授業を行っている。演習とは違い講義なので知識の羅列になりがちだが、臨機応変にそうならないようにしている。今年は西洋近代を15回でできる範囲で扱っていて、年によって扱う時代は変えているのだが、知識を前提にしないのでどの時代でもモデルとして扱える。試験はノート持ち込み可だが、授業自体板書ではなくプロジェクターなので、ノートは必要最低限のメモ書き位にさせており、自分の言葉で考えなくては出来ない試験にしている。

鈴木：作品に対する姿勢、自分の眼で作品を観ることが出来るか、借り物でないことばで表現できるか、自ら調べる姿勢を身につけられるか、教材としたときに児童生徒の発言に対応できる自信をもてるかが授業の中心になっている。意見を述べてほしい。

内藤：先生の考えはわかるがすごく難しい。学生の妄想が外れすぎた場合どうするのか。

小川：それも面白いのだが、授業の内容として間違っている場合は問題。独自の考えを書けるのか、的外れになるのかは試験答案の勝負になる。

鈴木：レポート形式の試験か。

小川：作品を観て論述させている。的外れにならない自分の観点で記述できるか、ただ普通に聞いたことを書いていただけでは評価できない。この授業では。

鈴木：鑑賞について書けといった場合、単にコピーで調べて絵を味わってない場合が多い。自分の場合は、制作者の立場で絵の制作構造も味わってもらいたいと感じる。

野崎：学生のレベルがわからないが、学校現場実践を考えたらどんな授業が理想なのか難しい。

ただ昨今の附属の研究授業を見た印象では、ある程度の知識を持った方がいいかと思う。授業の中でどう提示するか、その面で紙媒体はあった方がいいのではないか。学生の振返りにとっては。

鈴木：知識という言葉が出たが、絵を見る姿勢、鑑賞する姿勢を身につけさせるという意味としてはいい授業だと思う。しかし単純に知識はないと困る。セザンヌ知らないで大学に入ってくるのは困る。美術の教員としてマチスの絵の良さがわかっても、マチスって誰？では。

内藤：授業ではゴヤについて、とっかかり、知識の情報があつたので入り込めてよかった。絵を見るとき、「とって」があれば登りやすい。

小川：作者の名前を知っていれば意味があるのかといえ、美術史の作品のタイトルは他人がつけているものが殆どだし、どうなのかということもある。間違ったとっかかりだと意味はない。実際授業なのでいろんな情報を言っているのだが、出来るだけ流す程度にしている。

栗原：ゴヤの生き方、処世術から授業に入ったので、学生にとっては興味を引きやすかったのではないかな。基本は自分で調べることだが、ちょっと言ってくれるのはありがたい。

野崎：基本はそう。鑑賞は広すぎて押さえきれない。ある程度代表的なところを教員が提示するのは必要で、それを学生がとっかかりにして深めていくしかない。それは学生自体だけではなく我々教員にもいえること。教える立場として自分自身で学び続けていくこと。小川先生はその姿勢を強調されていた。

鈴木：学生が教員になって教える立場になった時に、自分で調べて知識を増やしていく姿勢をつくる、そのとっかかりをつくるのが我々の仕事。小川先生がゴヤの洗練されていなさを示していたのは学生としてはなじみやすくよかった。

野崎：作品としては如何なものかでも、その次の時代に何かのきっかけとなることもあって、そういうことが伝わるのは大切。

鈴木：学生からするとゴヤは歴史上の人物だからすごいんだと思込んでいる。それを最初から壊してくれた。ゴヤの洗練されてない下手さが近代に結びついていく。うまいだけ、器用なだけが、新しい時代を切り開くのではないという事がわかってくれたらよいと思う。

野崎：ゴヤがタペストリーの下絵描きをしていた話は、日本にはめずらしいであろう絵描きの仕事のあり方で、学生を惹きつける。

小川：西洋の価値観や多様性は、知識以前の体感すべき前提で、そういったことは最初にきちっと言った方がよいかもしれない。

鈴木：知識だけでなく最終的に自分の眼をもっていないと、教員になって鑑賞教育しても、自分が作品

を味あわないで鑑賞できてないままに教材開発してしまう例がある。そういう意味でこの授業の意義は深い。

小川：鑑賞の訓練が足りてないまま鑑賞教育をやろうとして、結局知識の羅列にならざるを得ないところがある。世間は知識を求めるが何の鑑賞教育にもならない。

野崎：バランスがいつも問題になる。

鈴木：美術理論・美術史Ⅰ、Ⅱ、美術史演習、の流れと組み立てを示してほしい。

小川：2年の後期に美術理論・美術史Ⅰで美術史を扱い、3年の前期に美術史演習がありそれは歴史的な作品を受講生が取り上げて解説させ、学外でも（京阪神含め）実物を見て議論する。

野崎：次のながれで学生の自主性を育てるのがわかった。

小川：3年の後期に美術理論・美術史Ⅱをやり討論議論のなかで美術理論を扱う。

共通認識 学生に考えさせること。学生にその学問の入り口に入らせるための姿勢作りをしている授業であった。有難うございました。

(敬称略)

【生活・健康系コース（保健体育）】

1 特別公開授業名 スポーツトレーニング論

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成26年10月16日(木) 第2時限・健康棟 E202 教室・南 隆尚 准教授・13名・12名（教員5名
大学院生7名）

3 授業概要

保健体育コースの後期授業では、小学校教科専門科目テキストを使用している授業がない。よって、従前の特別公開授業となっている。

本時の南准教授の概要を以下に列記する。

- ① 10分間の小テスト
- ② スポーツ外傷とスポーツ障害の違いについて
- ③ RICE 処理について（Rest Ice Compression Elevation）
- ④ インピンジメントシンドローム
- ⑤ 若木骨折
- ⑥ 患側と健側の認識について
- ⑦ テーピングで使用する各種テープの説明
- ⑧ テーピングの目的について
外傷予防・再発防止・応急処置・リハビリテーション・治療としてのテーピング
- ⑨ テーピングの効果について
関節可動域の制限・固定・圧迫・靭帯および腱の補強・パットの固定・精神的支え
- ⑩ テーピング前のチェックについて
外傷の程度・シェービング・クリーン&ドライ・皮膚の保護
- ⑪ テーピング後のチェックについて
テンション・違和感・合目的・痛みの具合・血行
- ⑫ テーピング効果の時間について
- ⑬ テーピングテープの使用法
切り方・はり方・はがし方
- ⑭ 2人1組でのテーピング実習

4 授業研究会およびFDワークショップ要録

研究会の冒頭に司会者より、特別公開授業を終えての感想を求められ、南准教授からは、具体的なケガの話をもっとするべきであった、ケガをしたスポーツ選手にどこまでやらせるのかが問題であるとの所感が述べられた。参観者の多くから、現場での教育実践に役立つ授業内容であるとの評価する意見が多くで、さらに、以下のような質疑応答があった。

Q：小テストの意図は何か。

A：前時授業内容の理解状態の把握および、知識の蓄積が目的である。

Q：テーピング実習では、テーピングテープの購入にお金がかかるのではないか。

A：個人研究費でまかなう部分もあるが、場合によっては、学生に個人負担してもらっている。

Q：解剖学的内容をどこまで広げるのか。

A：やり過ぎると収まりがつかない。教育現場で使う内容をどこまで理解させるのかが課題である。運動学や生理学等の他の授業においても重複した内容があると思われるが、重要な内容は繰り返しが必要と考えている。

Q：受講者には小学校希望者，中高希望者，長期履修生が混在しているがどこを対象としているのか。

A：校種を問わず，体育授業において応急処置ができるようにしたい。また，運動部の顧問になった時に困らないレベルにしたい。

本授業はテーピング理論とその実習で終わっている。今後の授業展開としては、体カトレーニングの理論、体力測定とメディカルチェック、コンディショニング、栄養、ドーピング、運動処方、指導内容の体系化等が展開される。南准教授は現在、全日本水球チームのナショナルコーチでもあり、初心者からトップレベルでの競技を指導できる幅広い指導理論と実績を有しており、教育者を目指す者において有益な示唆を与えてくれるものと思われる。

(文責 木原資裕)

【生活・健康系コース（技術・工業・情報）】

1 特別公開授業名 電気基礎（実習を含む。）

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成26年10月20日(月) 第4時限・B302教室・宮本 賢治 准教授・10名・2名

3 授業概要

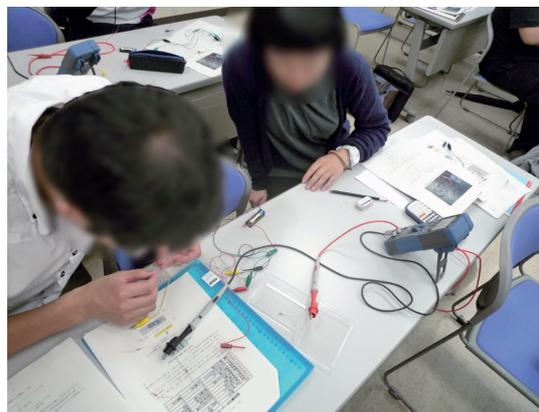
現代において、電気は我々の身の回りのあらゆる分野で利用されており、生活する上で必要不可欠である。そのために、電気について理解を深めることは重要である。本授業では、電気工学の基礎となる電気回路や電磁気現象を中心に学び、電気の基礎的な知識と技術を習得し、活用できることを到達目標とする。

電気回路の電圧、電流、抵抗とオームの法則について講義した後の本時では、テスターの使い方について知り、乾電池と抵抗器を使った電流や電圧の計測実験を行うとともに、オームの法則によって計算した理論値と実測値を比較し、電気の基礎的な知識を深めた。また、抵抗値のカラーコードの読み方に加え、演習問題を通して合成抵抗の計算方法などの習得も目的とした。

オームの法則や合成抵抗などの理論については中学校・理科の学習内容で取り扱われ、一方、テスターを用いた電流や電圧の計測技法は、中学校・技術のエネルギー変換に関する技術に含まれる内容である。このように、電気に関わる理論や技術は複数教科の専門と密接に関連し、基礎的な知識と技術を習得するためには教科横断的な理解が不可欠である。



授業の様子1（テスターの使い方の実習）



授業の様子2（テスターによる電流計測）

4 授業研究会要録

中学校・技術と高等学校・工業として課程認定されている本授業は、学校教育で取り扱う内容を教えるために必要な電気の基礎的な知識と技術を習得することを目標としていることから、理論的な内容から実用面までの広い範囲を取り扱うように工夫している。本時では、テスターの具体的な使い方として、テスター・リード（赤色、黒色）の接続方法に加え、抵抗器のカラーコードを取り上げ、その読み方と覚え方について配布資料を用いて説明した。

教育実践力を培う授業を構成するという点において、とくに小学校教員志望の受講生に対しては、小学校で学ぶ電気の内容（電池と電球の接続方法、モータや発電の仕組みなど）を取り扱い電気工学との関連性を示すことが求められた。

電気に関わる実験では、テスターをはじめ、多くの計測機器を必要とし、所定の精度で計測できなければならない。受講生に見合った数量を備えるため、また、老朽化した計測装置の更新のため、継続して予算要求し、計測装置を適切に維持・管理していく必要がある。

プレゼンテーションを使わず板書と演習、実験を中心とした教授方法により、受講生が受動的な学習態度とならないようにし、また、班単位で実験を行うことにより、学生間での学びあい、教えあいも期待している。板書では、テスター、抵抗器、電池などのイラストを描くことも多いため、板書する時間を短縮するために「イラストを描いた磁石付きボール紙」などの教具を準備する改善などが求められる。

5 FDワークショップ要録

本授業は「実習を含む。」ため、本来ならば実験室を使うべきであるが、受講生が多いため学生の実験時の安全性確保の点から講義室で実験を行っている。技術・工業・情報コースの技術電気実験室の面積は、本学設立時の大学院生数分のみしか考慮されていないため、学部学生に加え、長期履修の大学院生の人数分を収容できない。このような状態により長期にわたり深刻な教育上の環境問題が生じている。また、講義室では、十分な電源の確保が困難である上、電気技術の危険性を演示するような実験（過電流による発火実験など）を実施することはできない。学生への教育環境を改善し、教育の質を高めるという観点から早急に受講者数に見合った実験室の手当てを必要としている。

本FDワークショップでは、大学院生を含めて3名とやや参加者は少なかったが、密度の濃い改善策や改善点について議論できた。



授業研究会・FDワークショップの様子

【生活・健康系コース（家庭）】

1 特別公開授業名 家庭経営学概論

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成26年10月27日(月) 第4時限・C105教室・黒川 衣代 教員担当・7名受講・5名参観

3 授業概要

○授業の目的及び到達目標について

この授業は、深い専門的知識を習得した教育実践力の高い教員となるために、家庭科教育の専門領域の一つである家庭経営学の基礎的な知識を身につけることを目的としている。家族関係学の分野と家庭経済学の分野を専門とする2名の教員が担当し、それぞれの専門科目である「家族論」と「消費者経済学」への導入的科目となっている。到達目標は、家族と家庭生活、消費生活に関する家庭科の授業を行うのに必要な基礎的知識を理解し、説明ができることである。

○当日の授業概要について

この授業科目は、家庭科教育コース小学校教育専修および中学校教育専修の学生にとって必修の専修専門科目であり、標準履修年次は1年次である。当日の受講生は、家庭科教育コースの学部生6名、家庭コースの大学院生1名であった。学部生1名が体調不良のため欠席していた。

当日の授業は、授業者が担当する前半8回分の2回目であった。全8回を通してのテーマは「人の一生と家族」で、1回目の授業では本時の前段階として「ライフサイクル」について学んだ。当日の授業内容は「ファミリーライフサイクル」であった。

まず、本時の授業への導入を兼ねて前時の授業内容であった「ライフサイクル」の復習から始め、キーワードとそれらの概念の意味を確認した。本時の授業では、「ライフサイクル」の考え方をを用いて「ファミリーライフサイクル」について学ぶことを確認し、家族の一生、すなわち家族の誕生と死について考えさせてから説明した。次に、「ファミリーライフサイクル」の「ステージ」について、「ライフサイクルステージ」の考え方を基にグループで検討しどのような「ステージ」に分けたかを発表、同様に「ライフサイクル」における「発達課題」は「ファミリーライフサイクル」においても考えることができるか、配布資料を参考に検討して発表した。再び、「ライフサイクル」と「ファミリーライフサイクル」を比べ、「ライフサイクル」は皆に共通してあるが、配布資料に示されたような「ファミリーライフサイクル」はそうではないことに気づかせ、その気づきから家族形成と家族の関わりは一通りではないこと、配布資料に描かれたのはひとつのライフコースであることを説明し、来週の授業は「ライフコース」であることを予告して授業を終了した。

受講生は、積極的に授業に参加し、教師の質問に対しそれぞれが自発的に答えていた。受講態度や発表から「ファミリーライフサイクル」について、十分に理解ができたと考えられる。

4 授業研究会要録

10月27日(月)16時20分～17時15分まで、家庭科教育コースの教員6名の参加者により授業研究

会・FDワークショップを開催した。最初に、特別公開授業を担当した黒川先生より授業概要（授業目的、到達目標、当日の授業概要、今後の授業計画等）についての説明があった。その後、授業について参加者の間で自由に意見交換をおこなった。以下に発言の概要を記載する。

- ・学生の宿題への取り組みも良く、積極的な発言や姿勢がみられた授業であった。内容では一方的な授業進行ではなく、グループワーク・ディスカッションが効果的に用いられており、そのために学生の積極的な態度や意欲を引き出すことができたものと考えられる。
- ・学生の授業に対する姿勢について、宿題への取り組みや積極的に発表を行うなど、意欲の高さがうかがわれた。一方で、板書された内容のみをノートにとる学生が多かったため、それ以外の口頭で説明のあった重要な内容等についても自主的にノートにとる姿勢を促したい旨の意見があった。
- ・授業中の学生の発言については、本日は偏りなく発言ができていたが、偏りがある場合は教員から積極的に発言を促すなどの工夫をしている旨説明があった。
- ・学部生に院生が混じった授業について、そうでない場合と比較した進行の違いに関して質問があった。院生1名が受講していたが、学部生とのディスカッションも活発に出来ており、授業はスムーズに進行できた旨説明があった。
- ・成績評価方法について質問があった。テスト、レポート、欠席の取り扱い等について説明があり、授業1回目に詳細を記載したプリントを配付している旨説明があった。シラバスにもその内容を記載してはどうかとの提案がなされた。
- ・高校までの学習内容との関連性について学生の理解度に関する質問があった。1回目のオリエンテーション等において、家庭科における当該領域（家族関係学）の位置付けについて触れ、確認・説明をしている旨説明があった。

5 FDワークショップ要録

授業研究会に引き続き、FDワークショップを開催した。今回のテーマは「よい教師を育てる授業とは」である。また、小学校教科専門科目テキストの課題についても議論された。

「よい教師を育てる授業とは」に関して：

- ・小中学校教員に必要な資質について、現場の教員の意見を例に議論がなされた。コミュニケーション力を向上させることや心身の健康等自己管理の重要性について意見が出された。前者については、少人数の授業が多い利点を生かして、授業の中でプレゼン等学生が主体的に取り組める内容を増やすなどの工夫ができるのではないかと提案がなされた。
- ・上記に関連して、丁寧で判別のしやすい字を書く力や滑舌の良さ、表情や姿勢など一朝一夕に身につかない資質について、現場に立つ前に学生のうちに身につけられるよう授業内での指導（発表や模擬授業等において）の可能性について意見が出された。
- ・学生の学習に対する意識に関して、学習内容を自らが教壇に立った場合にどのような授業を行って教えるかなど、将来の教員としての自分を想像できるような授業を組み立てるなど、学生の目的意識を高める授業内容の必要性について意見が出された。
- ・教科専門科目への意識が低い学生が見受けられる点について議論がなされた。当初、小学校希望から高校教諭へ進路変更した学生等の例が出され、教科専門科目を可能な限り受講してもらい、そうすることで専門科目の魅力が伝わり、将来の進路の選択肢が広がることにもつながるとの意見が出

された。多数の前例があるので、学生の専門科目の積極的な受講を促したい。

「小学校教科専門科目テキストの課題」に関して：

- ・授業内容の基礎事項の参照先（テキスト）としては有効であるが、応用的・派生的な内容や update が必要なデータ等について全てを記載するのは難しいとの意見が出された。
- ・テキストのデータは古くなるため、改訂等はどのようにするのか課題がある。
- ・参考書的な側面も有しているため、ワークシート的な活用との両立が難しいとの意見が出された。
- ・索引等を設けてもよいのではないかと意見が出された。

以上、授業研究やワークショップ、学生に対して日頃感じていることなどの意見交換を通して、今後の授業での課題や工夫点を共有することができた。今後、教員が学生を指導するうえで役立つ特別公開授業およびFDワークショップであった。

以上



【国際教育コース】

1 特別公開授業名

国際教育協力特論Ⅱ

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成26年10月27日(月) 第3時限・B208教室・小澤大成・9名・2名

3 授業概要

授業の目的及び主旨は、授業研究を開発途上国の文脈に即して体験的に学ぶことを通じて、途上国での授業改善にとって必要な手法を理解する。到達目標は途上国での授業改善の実践に必要な資質を身につけることである。

本時の授業は、ケニアの初等学校における第8学年算数の授業ビデオを参観させ、その授業内容を記録されるとともに、授業の良い点、改善すべき点について2つのグループに分け、話し合わせた。その後結果を共有させた。そして次回以降の授業で詳細な観察を行う旨述べたのち、授業を終了した。

この時間の授業では意図して参加者に授業記録を取るよう指示しなかったが、授業参加者のノートを見る限り、何人かの参加者が授業概要を記録するだけでなく、教師の板書や図、生徒の振る舞いなどを記録していた。次回以降の授業でより詳細な記録作成につなげていきたい。

4 授業研究会要録

授業参加者に対し授業リフレクションシートへの記録を求めた。記載については以下である。

【この授業で分かったこと】

- ・参加者の分析の視点および子供の主体性を大事にする点がほぼ共通。良い点はグループワークなど子どもの活動に注目。改善点は教師の話す量や板書。
- ・ビデオの授業は中国での教授法と同様。
- ・良い授業は先生の説明が分かりやすいだけでなく、生徒が理解できるということ。
- ・授業計画の重要性。
- ・生徒数が多く、個々の達成段階をチェックできない。
- ・グループで話し合うことで新たな視点が得られた。
- ・改善点となるとどうしても教師側に着目する。

【授業で疑問に思ったこと】

- ・ビデオの授業目的を達成するのに別の方法があるのではないか
- ・生徒が向かい合っていると黒板が見づらいのでは。
- ・他の参加者はビデオの教師はしゃべりすぎと指摘するも、単元の中で説明が必要な段階であるかもしれない。
- ・課題のできない生徒をどうフォローするか。
- ・ビデオの授業の前後のつながり。

- ・授業の課題をどのように解決していくか。

【今後調べてみたいこと】

- ・課題ができない生徒をどのようにフォローしていくか。
- ・中国よりケニアの授業の方が手操作をしていた。ケニアの授業方法をもっと知りたい。
- ・より良い授業運営。
- ・宿題の正解率。
- ・自分たちの改善提案がその国で無理なことかもしれない。ビデオの教師の意図を考えてみたい。
- ・授業の目標は何だったのか。もう1回ちゃんとビデオを見たい。

このデータを踏まえ、授業者より、「授業参加者は自国の授業とビデオの授業の比較、他の参加者との考えの共有などを行い、途上国の授業に関する見解を深めていることがわかった」とのコメントがあった。

参観者からは「ビデオをフルに見せると時間がかかるが要点だけ見せる方法はなかったのか。2コマ続きで行う方法もある」という指摘があり、授業者より「授業をフルに見せることに意義があり、時間に関しては、2コマ続きの授業を行うなど工夫していきたい」旨回答があった。

5 FD ワークショップ要録

- ・この授業形態は、途上国における具体的な授業を素材として、その授業を観察しその改善を図るといふ、授業研究の形式を踏まえた教師の実践力向上を図るものとなっている。
- ・学生からの指摘があったように、一方的に途上国の授業は劣っていると考えのではなく、途上国の文脈に沿って授業をみるという視点をつけさせることは教師の実践力向上にとって肝要である。

Ⅲ 平成 26 年度特別公開授業に係る全体会

平成 26 年度鳴門教育大学 F . D . 推進事業全体会実施要項

1 目的・意義

本年度の全体会は、

- ・SPOD における講師派遣事業の講演（講演講師；徳島大学宮田先生，提供プログラム；「学生の学びを促すシラバスの書き方」との連携
- ・シラバス及びモデルカリキュラムで作成した小学校教科専門科目テキスト並びにカリキュラム・ガイドブックの検証
- ・教職大学院における F D 実施状況の報告

の 3 件を柱として，講演，発表，報告及び質疑応答を全体会として展開することで，今後の，授業改善等に繋げることを目的とする。

専攻・コースを超えて討議を行い，課題を展開することで，授業改善等につなげ，教育実践力を培う授業のあり方を共有し，教員養成大学である本学における F D についての理解を深めることと，併せて，モデルカリキュラム及びカリキュラム・ガイドブックをより一層，発展・飛躍させることも期待できると考える。

2 対象者 本学全教員

3 期 日 平成 26 年 10 月 29 日(水) 13 時 10 分～16 時 10 分

4 会 場 B101 講義室（講義棟 1 階）

5 講 演 講演者 徳島大学教育改革推進センター 准教授 宮 田 政 徳 演 題 「学生の学びを促すシラバスの書き方」

6 発表，報告

- ① 「カリキュラム・ガイドブックの開発と活用－「協働する F D」の推進にむけて－」
社会系コース 梅津 正美 教授
- ② 「ピアノの実技指導において，学修課題で学生に伝えたいこと
－入学までのピアノのレッスンと大きく違うことは－」
芸術系コース（音楽） 森 正 准教授
- ③ 「小学校教科専門科目テキスト「算数」を使用した授業の検証」
自然系コース（数学） 佐伯 昭彦 准教授
- ④ 「教職大学院における F D 実施状況の報告」
教職実践力高度化コース 小坂 浩嗣 教授

7 日 程

時 間	内 容
13:10 - 13:15	開会挨拶（西園理事）
13:15 - 13:20	趣旨説明（司会者）
13:20 - 15:00	講演・質疑応答
15:00 - 15:10	休憩
15:10 - 15:20	発表①
15:20 - 15:30	発表②
15:30 - 15:40	発表③
15:40 - 15:50	発表④
15:50 - 16:05	全体討議
16:05 - 16:10	閉会挨拶（司会者）

FD 推進事業全体会

(司会 山田 芳明) FD 推進事業の一環であります「FD 全体会」を開会いたします。それでは、開会の挨拶を西園理事にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

(鳴門教育大学 理事・副学長 西園 芳信)

失礼いたします。先生方、26 年度 FD 推進事業にお集まりいただき、ありがとうございました。今年度の FD 推進事業の全体会を開催するにあたりまして、担当副学長として一言ご挨拶を申し上げます。

FD 推進事業は本学教員の授業実践力向上、授業に対する学生の意識の深化を図ることを目指すものでありまして、具体的には次の 3 つのことを目的にしております。まず 1 つは鳴門教育大学は教員養成大学として学生の授業実践力を培うということであります。そのためにより良い授業の在り方を共有していく。

2 つ目が、本学における FD の在り方を検討し構築することです。今日のように 10 月の第 5 週に設定したのですけれども、年々やはり参加者が少なくなっていることも現実にあります。こういうことで FD の在り方そのものについても再構築する必要があるかなど、そういう課題を共有している訳です。3 つ目に、本学の学生の現状を踏まえて授業活動のための課題を明確にしていくということでもあります。

この目的を実現するために、26 年度の FD 推進事業のプログラムは以下の 3 つの事項から成っております。1 つは公開授業、10 月 14 日から 10 月 20 日まで公開授業を行いました。それから 2 つ目の事業が特別公開授業と特別公開授業に関わる授業研究会、FD ワークショップを 10 月 14 日から 10 月 17 日に開催いたしました。

それから、本日の全体会です。この全体会の目的はコース・専攻を対象として実施しました授業研究会、FD ワークショップで出されました課題について、コース・専攻を越えて発表していただき、全体会において討議を深めて授業改善につなげていくということを目的にしております。

そして、この全体会の本日の内容は次のように大きく 2 つのプログラムから成っております。1 つは講演であります。今日は徳島大学教育改革推進センター准教授の宮田政徳先生にお出でいただいております。テーマは「学生の学びを促すシラバスの書き方」ということで、私たちが授業を進めていくにあたってシラバスは必須であります。

その「シラバスの書き方」ということについて講演をいただいて、私たちの授業の在り方に反映させていきたいというように思う訳です。宮田先生におかれましてはご多忙の中、本学の FD 推進事業にお出でいただきましてありがとうございます。御礼申し上げます。

そして 2 つ目の大きな内容は発表報告であります。課題に対する発表報告です。その 1 つが「カリキュラム・ガイドブックの開発と活用－協働する FD の推進にむけて－」、梅津正美教授に発表いただくことになっております。本学が継続的にモデルカリキュラムを開発・推進してきた訳ですけれども、その中でカリキュラム・ガイドブックというような枠組みを作って、これによって授業全体を構造化していくということをやってきた訳です。それについての報告をお願いしております。

それから 2 つ目が「ピアノの実技指導において、学修課題で学生に伝えたいこと－入学までのピア

ノのレッスンと大きく違うことは—」ということで、森正准教授にご発表いただくことになっていきます。本学は25年度から学修課題ということで、シラバスの中に盛り込んで授業を続けるということを進めております。その成果あるいは課題ということについて報告いただきます。

それから、次が「小学校教科専門科目テキスト『算数』を使用した授業の検証」ということで、佐伯昭彦准教授に発表いただきます。本学はモデルコア・カリキュラムの中で教科内容学を反映させた教科専門、つまり小学校教員養成の専門2単位、それについて教科書を作成し、内容も汎用性、一般化できるものにして、このテキストの実際の試行によって、どういう風な課題が出てきたのかということを発表いただきます。

それから、4つ目が「教職大学におけるFD実施状況の報告」ということで、小坂浩嗣教授に教職大学院の方のFDについて報告いただいて、FD推進事業として全学的に共有していくということをやっていく。それぞれの発表・報告をいただく先生方、準備いただき大変ありがとうございました。御礼申し上げます。

それでは、このような趣旨で26年度のFD推進事業全体会を開いていきたいと思っております。山田先生の司会のもと、よろしくお願いいたします。

(司会) 西園先生、ありがとうございました。司会をさせていただきます、芸術系コース(美術)の山田です。どうぞよろしくお願いいたします。先ほど、理事の方から内容の詳細なご紹介がありましたので重複を避けたいと思います。

まず、本日は講演を宮田政徳先生にお願いしております。宮田政徳先生の略歴について少しご紹介をさせていただきます。前の左手の方に出ておりますので、ご覧いただければと思いますけれども、宮田政徳先生はご専門が英語学、それから高等教育ということですか。

略歴をご自身でもご紹介いただけるということですのでまとめさせていただいて、現在、徳島大学の共通教育・英語を教えておられる傍ら、全学のFD企画・運営・実施に携わっておられます。それでSPOD(スポッド)ですね、四国地区教職員能力開発ネットワークではコア校である徳島大学のFD担当者、またSPODのFD専門部会の副会長を務めておられます。

本日は「シラバスの書き方」ということでご講演をいただきます。それでは宮田先生、どうぞよろしくお願いいたします。

【講演】

「学生の学びを促すシラバスの書き方」

(徳島大学教育改革推進センター 准教授 宮田 政徳)

皆さん、こんにちは。今日はお忙しい中、FDの講演会に参加していただきましてありがとうございます。最初に私事なんですけど、私もこの鳴門教育大学には昭和62年から10年間ぐらい、英語の非常勤でお世話になったので、久しぶりに今日、来させていただいて懐かしい思いと新しくできた建物もあって、だいぶ変わったなあと思って吃驚しました。

ということで最初に、私は紹介にありましたようにSPODの徳島大学で担当をやっているんですけども、今回の講演は初めてSPODの事業を利用したということで本当に嬉しく思っています。SPODのプログラムということで、また引き続き来年からも利用していただければと思います。

それから徳島県内のFDネットワークとしてT-SPODですね、徳島SPODというFDSPODがあるんですけど、毎年、学年末に行っているんですが鳴門教育大学の先生方は時々参加していただいて授業の実践とかを報告していただいておりますので、ご協力いただいております。

それでは、今日は15時までということでお付き合い願おうと思います。今、所属は去年までは教育改革推進センターだったのですが、徳島大学も教育改革で色々どんどん変わっていますので、この4月から総合教育センターの教育改革推進部門というところに所属しております。

簡単に自己紹介をさせていただきますが、専門は英語なんですけど2002年より、それまで医療短大ですね、徳島医療技術短期大学にいたんですけど、その後、大学開放実践センターに異動しまして、昨年度より教育改革推進センター、今年は総合教育センターのFDをやっております。

今日のお話ですが、パートを2つに分けて行いたいと思います。最初は少し教育現場の話、教育のパラダイム転換、それからシラバスとは何かということを考えてみたいと思います。それから具体的にシラバスの書き方という風に進んでいきたいと思います。それでパート2、これは付け足しなんですけど、最近のグラフィック・シラバスという考え方、そういうものも作ろうかなと思ったり、それを簡単に紹介して実際皆さんにお試しで作っていただいたらと思います。

最初はこの3つですけれども、教育のパラダイム転換ということで2つ、ティーチングからラーニングということで、これは全世界的な流れです、高等教育の世界では。以前は高等教育では先生が教えるだけだったのですが、最近は学生の学習に重点を置かなければいけないということで、以前は学生に何を教えたいとか先生の独自の判断で行っていたんですけど、それが最近は学生に何ができるようになってほしいか、学生は何ができるようになるかという、ラーニング・アドバンスが重視されるようになってきています。

ということで、このアドバンスを重視するので、学生さんが分かるように、この授業を取るとどういう到達目標に達することができるか、これをシラバスに書かなければいけないということで、最近のシラバスはこの到達目標を明確に書く必要があるという風に力点を置いています。

今日は皆さんに個人ワークをやっていただきたいので、座席をできるだけペアになって座ってください。できるだけ2人、どうしても奇数になる方は仕方がないんですけど、座席を移動していただいて、お2人ずつでお隣同士に、前後は少し話しにくいかもしれませんが座席を移動して、できるだけお隣同士のペアが仕事がしやすい。どうしても奇数の場合は3人でも結構です。一応、2人ずつ組んでください。

それで後でも言いますが、アクティブ・ラーニングも推奨しています。皆さん先生方、実践されている方もあると思いますけれども、授業中に先生が教えるだけではなくて学生さんも参加するということで、今から行うディスカッション、一種のアクティブ・ラーニングなんですけど、お隣同士で話し合っていて、その結果を皆さんの前で報告してもらおうということです。

シラバスとは一体何なのか、何のために作るのか、その辺のことをお2人の先生方で相談して、私はこのために作っているとか、シラバスはこういう役に立つのではないか、その辺のことを話し合っていて知恵を出し合っていて、話し合ってみてください。ディスカッションしてみてください。皆さん同じ大学の先生方ですから、自己紹介は無しでやっていただきたいと思います。

〈ディスカッション〉……約4分間

それでは、どうでしょうか皆さん、ご意見が出つくしましたでしょうか。本当は私も私なりに考えたことはあるんですけど、私の意見とは違う意見も出てくるかもしれませんけれど、一応私は学生にとってのシラバス、先生にとってはどんなシラバス、書いてあるんですけど、2～3グループの中でどのような話になったか、聞いてみましょうか。そこのお2人はどんな話になりましたか？

意見①

「よく言われている“契約書”ということなんですけれども、学生と教員の間で、教員の側としてはこういう教育内容を提供するという、ロードマップという言葉を使いましたが、そういうことを指し示して行って、それに沿って学生の側からはこの15コマの間でどのような力がついて、そのために何がされていくのかということ。そのためにいったいどういう方法が用いられるのかということだろうと思います。ただ学生がそれを見ていないということが問題かなという意見が出てきました。」

どうもありがとうございました。問題点をご指摘いただきましたが、もう1グループお願いします。

意見②

「このシラバス、シラバスと言われたのは最近だと思うので、ある意味そういう社会の要請があって、それに対して外向きに仕方なく書いているもので、学生の理解といったものを考えながら授業を行いますので、シラバスどおりにいかないことが私は多いです。7割ぐらいしかいかないですね。一応、こういった内容をしますよと、学生が分かっていない場合に、こういった授業をしますというようなことが1つ。ただ学生が見ていないということはあると思います。」

ありがとうございます。先生の中にもシラバスを作るのが嫌というか、時々シラバスを途中で変える先生がいるので、最初から変えるんだったら…という先生がおられるんですけど、やはり一応最初にどんな授業なのかということを示した上で、その後の変更は可能だと思うんですけど、シラバスはあまり最初からガチッと決まったものではないと思いますが、もう1組どうでしょうか？

意見③

「自分の意見として、自分の授業に関しては学生はシラバスを見ていないです。というのは取る授業が決まっているので殆ど見る必要がないということで、学生にとってはシラバスがあってもなくても実質は影響はないということですが、ただ授業者にとっては到達目標を考える時に、身に付けるべき能力を明らかにしないとイケない。その作業から始まって自分の授業内容をもう一度反省して、振り返る時には非常に役に立っているなと思います。」

どうもありがとうございます。今「振り返る」ということを仰いましたけど、最近の話題も学生の学習がしっかり定着しているか振り返るリフレクション、今年のSPODのフォーラムが高知大学で行われましたが、そのテーマが「リフレクション学」、振り返り・省察ということで東京大の中原先生にお話しいただいて、その辺のところも大事で、私はその辺の話はできないのですが、それではここは行きましたので、次に行きましょうか。

だいたいシラバスは4つぐらい大きい性質というか、重要な点があると言われてます。やはり最初は事務的な連絡として内容とか、必修・選択とか、その辺のことで契約書という、たぶんこの考え方はアメリカから入ってきたんだと思います。言葉自体が英語ですからね。アメリカは契約社会ですから、ですから学生にとって、学生というのはメーカーであれば消費者とか言われていますけれども、消費者のニーズに合わせて授業をして、それに違反すると契約違反だというので、そういう契約システムを取らなければいけない。

それから学術情報補助、これはシラバスで色々この授業を勉強するために色んな補完として参考の書物とか、最近インターネットのWebページがありますけど、色々情報の補助としても機能している。それから授業計画書ですので、どんな授業をやるのかという計画、この4つが一番大きなシラバスの柱です。

それで、最初に私が考えたのは学生にとってシラバスはどういうものか、「個々の授業の目標・意義を解説して学習意欲を向上させ…」、この辺のところがポイントなんですけどね。先生方は自分の授業をできるだけ魅力的に売り出すような感じで書かないと、学生さんがシラバスを見て「この授業は面白くない、退屈そうだ」ということになると良くないということで、この授業を取るとこんなことができるとか、知識が増えて役立つとか、その辺のところも書かなければいけない。

それで、あと授業計画、授業方法、評価方法、この辺が学生さんにとっては一番重要なところですね。それから予習・復習というのが最近よく重要だと言われてますので、授業外学習と言われるもので、これも先ほどのように色んな参考書を示すことによって、きちんと勉強しなさいということ、事前・事後に予習・復習をするということも書いておくと便利です。

それから、選択科目の場合は絶対にこれは必要ですね。自分が選みたい時の判断基準をシラバスから得る。時々大学の先生が選択で選ばれるために、開講の前に自分の授業をアピールするために、ミニ発表みたいな感じでやっているところもあります。

この前、九州大学に行ったんですけど、九州大学の基幹教育院というところは、色々一般教育でアクティブ・ラーニングということで、先生を選ぶためにズラッと前に出て、自分の授業はこんなのだと言ってシラバスを実際先生に簡単に説明してもらおう。必修科目の場合はどうかと言うと、これはやはり取らなければいけないんですけど、自分で学習計画を立てるためには役立つのではないかと思います。

今度は教員ですね。先生にとっては先ほど言ったように契約書類ですからね。やはり責任を持つ必要があるということで、授業に対する責任感ということで、あと学生たちに授業を安心して受けなさいということで、安心感を持たせてあげられるということで、これも先生の役目かと思います。それと、先ほど言いましたが教室外での自習ですね、授業外学習のガイドブックになりますから、学生さんはそれを見て自分で自主的な勉強ができる。

それから4番、これは結局シラバスが15回、徳島大学は最近16回で最後は総括的な試験ということで、自分の授業プランを作ることができるということですから、一番最後のところは授業において本質が何かを考えるとということで、大学の先生は本当に教える情報が多いですから、あれもこれもということになって沢山教えたくなるんですけど、やはりその中から厳選して15回、しかも1時間・90分と決まっていますから、そこをどんな教材を使ってどんな内容を教えるのか、授業の前に計画することが大事だと思います。

あと最後のところ、皆さんの大学では他の先生のシラバスも見ることができるのではないかと思いますけど、最近では Web 上に載せているところもありますが、他の先生のシラバスを見ると、自分の領域に近い先生、例えば「〇〇学Ⅰ・Ⅱ」とかありますが、Ⅱの先生はⅠの先生のシラバスを見て、これはⅠで勉強しているんだということで、私はそれを発展した授業をしようということで、他の先生のシラバスを見て自分の授業を受ける前にどんな勉強をしているのか分かりますから、やり易いのではないかと思います。

それで、最初にシラバスに記載する項目、先ほど少し鳴門教育大学さんのも見させていただいたのですが、だいたいこの辺のところはあまり変わりません、事務的な情報ですね。授業科目名ということで科目コード、実は今徳島大学のカリキュラムマップを作成しているのですが、来年はナンバリングを付けようということですね。

ナンバリングというのは科目に番号を付けるんですけども、どの科目群にあって何年生が受講するとか、それから難易度ですね、初級・中級・上級、これも日本の大学でも最近あちこちで行われています。これは元々アメリカの大学で行われていたもので、それを日本に導入しようということで、このナンバリングも将来はどこの大学でも取り入れられると思います。

あと、この辺は単位数とか対象の学生さん、必修・選択、授業形式、後で言いますがどんな授業をするのか、講義なのか演習なのか、それから一番下のところは先生に連絡する場合、どこに研究室があるのか、Office hour、その辺のところを書いておくともう学生さんは連絡しやすいと思います。

次に、授業の概要を書いていただきたいと思います。この授業はどんな授業なのかということで、概要の書き方なんですけど一応カリキュラム上で位置づけるということで、学部・学科でカリキュラムを作って、それに従って授業をされていると思うのですが、自分の授業はこの学科のカリキュラムの中のどこに位置づけるのかということ。

それから、自分の授業は学部の中でもどういう分野を扱うとか、その辺のところ。初級の入門になるとか、この授業でどんな知識・スキルを獲得できるのか、どれくらい勉強することができるのかということをお話しておく。

それから、これは今徳島大学ではシラバスのガイドラインを作成しようとしているんですけど、授業外学習をどこに書くのかということで今検討をしているのですが、あと目的・目標とかありますけど、今のところ概要に授業外学習を書いたらどうかという話になっています。この授業ではどんな予習・復習をしなければいけないのか、求められているのかということですね。

今の授業外学習についてですが、これは平成24年8月の中教審答申、これでだいぶ強く力説されているんですけど、最初のところ「シラバスは単なる講義概要（コースカタログ）ではない」ということで、学生が授業のために主体的に事前の準備や事後の展開、事前学習・事後学習を可能にして、授業の工程表として機能するように作りなさいと。それで徳島大学も主体的に事前学習・事後学習をさせよう、これをどこに入れようかということですね。

授業の目的なんですけど、一応私は目的と目標を分けて書いた方が良くないかなと思いますが、目的を具体的に達成させるために必要な目標があるという感じで、最初に目的の話をするんですが、1番のポイントは学位授与の方針というのはDP（ディプロマポリシー）と言いますが、たぶん鳴門教育大学の皆さんもDP・CP（カリキュラムポリシー）ということで、この一番最後のDPとの整合性を保つことが必要である。

こういう学生さんを養成して卒業させるんだという、そのためにはこういう勉強をしてもらうということで、各カリキュラムの中の授業ですけど、こういう目的のためにやっているということで、その授業目的ですね。DP との整合性を保つことが必要だということです。この DP を達成するために自分の授業はどうしてあるのかという存在意義を自己主張する。

このポイントは、学生がこういうことが出来るようになることを目的としているということで、先ほど言いましたようにティーチングからラーニングに行っていますから、先生が主体ではなくて学生を主語としている。この場合の各動詞ですが、目標はもう少し下位の目標ですから行動目標、具体的な動詞になりますが、ですから目的を書く場合は認識する、理解するとか、こんな感じで少し概念的な動詞です。

授業の目標の方ですが、この目標は到達目標とか行動目標という言い方があります。一番最初は到達目標になりますが、実際どういうことが出来るようになるかということで、これも先ほどの目的と同じですね。学生さんを主語としている。それから授業の目的と対応して、その目的を達成するために下位の目標があるということで、ですから目標の場合は1つに限らず、1つの目的に対して複数の目標が設定されています。

この場合、目的では「理解する」というような概念的な言葉だったのですが、今度は目標は観察可能な行動で表現するというので、動詞は知識・態度・技能の3つの活動領域を書くということですね。この3つの学習活動というのはよく言われているのですが、知識・態度・技能。

それから必ず目標の場合、結局授業の場合は最後に評価しなければいけませんから、その目標が達成されたかどうか評価をするために、こういう条件が入っていなければいけないということで、こういう条件でこういうことが出来るようになる。こういう基準のもとでこういうことが達成できるということで評価しやすいような条件基準が入っていれば良い。

それから、目標が1つ1つ独立していることが大事なので、目標がいくつもあって混在していると評価する時に難しいので、お互い目標同士の内容が重ならないように、そうすると評価する時にやり易いということで、目標はできるだけ独立していると良い。

今度は目標に記述する動詞ですが、先ほど申しましたが具体的概念をもつ動詞で3つの学習領域のものを使う。最初に認知領域ですね。これは類別する、説明することができるとか。2番は情意領域ですね。態度とか習慣、こういうことを表現することができるとか、そんな動詞を使えば良い。それから技能領域ですね。こういうことができるという、この3つの領域に分けて書くと書きやすいという話です。

今度は学習の3領域の話をしませんが、これは有名なベンジャミン・ブルームさんのタキソノミーです。1955年ですから無茶苦茶古い話なんですけど、今だに色々これが出てきます。学習領域を3つに分けて、認知領域・情意領域・技能領域ですね。これに対して学習活動は認知領域では知識理解が中心で、情意の場合は関心・態度、技能の場合は技術・技能、こういう学習活動、ですからこの3つに分けて学習目標を書けば良いということです。

認知領域に限って言えば、一応下の方は知識ですので覚えるしかない。でもこれは矢印がありますけど、学習の質としては一番下の部分ですね。知識を覚える。覚えるだけではなくて、それを自分のものとして理解して、更に上の方にありますが応用していくような、この上の方に上がっていくと認知領域の学習活動の質が高くなるということで、この辺も各先生方がどこまで目標を設定するのか難

しい。医学系だと、おそらく殆ど知識の詰め込みが多いということなのですが、一応これが学習活動の質ということですね。

あと、学習活動の質で目指すのはディープラーニングとサービスマーケティングという考え方があります。これは皆さんお聞きになったことがありますかね。深い学びと浅い学びということで、ディープラーニングというのは先ほどありましたが知識から理解・応用ということで、かなり知識の学習の質が高いということですね。

それに対してサービスマーケティングは、単に教員が知識を教育するだけですからすぐに忘れるということで、何か昔よく私も試験の時に一夜づけでやったことがありましたけど、一夜づけというのはサービスマーケティングのことなのかなと思います。これはイギリスのスコットランドの大学なのですが、2008年に行ってきた、そこの先生がディープラーニングとサービスマーケティングということを仰っていました。一応、私たちはディープラーニングを目指した方が良いと言いますが。

これもFDの学会ではよく出るんですけどね、アメリカの国立訓練研究所が出した「ラーニングピラミッド」という考え方があるみたいです。ピラミッドになっていますけど、これは学習がきちんと身に付くのは、こういう活動がピラミッドになっているんですね。一番上の講義ですね、講義で身に付くのは記憶率でいうと5%しかないということで、講義をしても学生さんは忘れてしまう。あと「読む」ですね、自分で読む。

それから視聴覚教材、やはり目とか耳を使うと20%ぐらい記憶が残るので、視聴覚教材を使った教育は割りと良い。あとは実験、これも自分で実験をやったりすると良いということです。ここで分かれていますけど、そのあとのチーム学習ということは、つまりこの辺からアクティブ・ラーニングになりますね。グループ討議、体験、一番下は他人に教えるのが一番良いということで、やはり人に教えることは非常に勉強になる。

あと、授業計画としての書き方ですけど、これは一応授業目標に対して計画を立てる。それから学生の状況に合わせて作るという方法、先ほども申しましたがシラバスは事前に作りますから、1回・2回授業をしてみても学生さんが理解していないという時には変更できると思いますけど、一応分かっているのか学生の状況に合わせて作る。それから自分のスケジュールにも合わせて作る。

あと授業方法ですけど、これは授業をどういう風に展開していくのか、どういう風に授業を行うのか、授業方法ですね。それから、その方法は講義なのか演習・実験なのか、それをきちんと記載しているということです。それから教材ですね。どういう教材を使うのか、ビデオ、スライド、資料。それから実験・実習の場合、グループ分けされると思いますが、これもどういう風に分けるのか書いておく。

それから、アクティブ・ラーニングを行う場合はどんな風に行うのかという、アクティブ・ラーニングについてもここに書いておく。それでアクティブ・ラーニング、何回も言いますが、今徳島大学では来年から大学入門講座にアクティブ・ラーニングを取り入れて、今年文科省のGPで「教育再生加速プログラム」に応募して、俗に言うAPなんですけど、徳島大学が国立大学では1つだけ採択されて、来年から初年次教育、大学入門講座にアクティブ・ラーニングを取り入れるということで、今定義をしているんですね。

徳島大学の定義は、一方的な知識伝達ではなくて、課題・演習・質疑応答、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションを取り入れるということで、学生が自ら自分で考えて能動的な学

習を促進させる双方向の教授・学習ですね。という風に定義をして来年度から行おうという計画です。

少し脱線しますが、アクティブ・ラーニングはどんな授業形態かという、今色々各大学で行っているのですが、一応学生さんが参加した授業であればアクティブ・ラーニングであるということで、ペア・ディスカッションですね。先ほど皆さんにやっていただきましたけれども、ペアになって色々話し合う。あと質疑応答は先生が学生に「どう思うか」ということで質問を投げかけて、学生さんが反応するのも、これも一応学生参加型のアクティブ・ラーニングになるということです。

あと、クリッカーというのをご存知ですかね。これは元々アメリカで始まったのですが、500～600人もいる大講義室で学生さんの意見を聞きたいので、先生方が「これに対してどう思うか」ということで選択肢が2～4で、学生さんが手元にリモコンみたいなものを持っていて、それで1番・2番・3番とスイッチを押す。

それでパソコンですから画面に出ます。1番の人が一番多いとか、正解はあるんですけどね。ですから先生によっては、それを使って更に「正解は3番だよ」とか、それでまた学生さんに更にディスカッションをさせて、皆が納得していくということで、クリッカーを使いながら行う。

あと、コミュニケーションカードというのは、学生さんとのコミュニケーションを取るために、授業の一番最後に「今日の授業に関して何か質問はありませんか」ということで、日本の学生さんに授業が終わって「はい、何か質問がある人は手を挙げてください」と言っても黙っている。ところが紙に書かせると、何か色々たくさん書いてくれて、授業中は何も質問しないのに、最後に「何か記載してください」というと、ビッシリ書いている学生もいるということで、これも面白いなと。

あと、大福帳、シャトルカード、ミニツツペーパー、これも今日授業で言ったこと、何か質問したいことを書きなさいということで、この場合シャトルカードというのは学生さんの質問に対して先生もそれに書き込んで、また返すということで、何回も学生さんとカードをやりとりしていく方法です。これもやっている先生がいますけど、結構これは大変なんですね。10～20人であれば良いのですが、200人もいれば全部の学生さんの意見を読んで、それに対してまたコメントを返すということですね。

あと、協働学習・グループ学習もアクティブ・ラーニングですね。一応プレゼンテーションは皆の前で発表する。ディスカッションとかディベートも話し合っ、それからロールプレイングで役割を決めて皆でやる。あと、これはカードを使って、分類法なんですね。ジグソー法というのは、1つの文章を切ってしまうと2～3人でまとめ上げる。元々どういう文章だったのかということで、ジグソーってありますよね、貼り合わせていくような。

あと、PBLというのはプロブレムベースラーニングとプロジェクトベースラーニングがありますけど、問題解決型学習のことです。あとTBLというのも最近、チームベースラーニングというのは高知大学の先生方が盛んにやっておられて、これはグループで学習をしますのですね。

事前に課題を与えておいて、翌週はそれに対する問題を作っておいて、グループで解答しなさいということで、ですからきちんと事前に勉強してこない、グループで学習をしますから、自分だけ勉強をしていないと、責任がありますからね。チームで勉強をするTBLという学習方法もあるようです。

あと、教科書・参考書、この辺は教科書、それから参考文献ですね。最近はホームページが色々充実していますから、このホームページも記載するというです。あと成績評価、これは授業目標を立てるとその後すぐに成績評価の方法を考えると、これはシラバスの最後にきますけど、本当は

コースデザイン、自分の授業をデザインした時は、目標を決めるとその目標をどうやって評価してやるかという評価の方法を目標・目的の後にもってきた方が良いという先生もおられます。どういう風に評価をするのか。

それから、様々な評価方法ということで、期末試験1本、一発勝負ではなくて、中間試験とか時々レポートを出させて、色々成績の割合を試験50%、レポート30%とか、色々評価方法を変えると良いという話ですが、配点の基準を明確にしておかないと学生さんがどれだけ点数を取れば合格するのか分からない。

あと評価内容ですね。ここも大事ですね、評価する内容が到達目標と関係ない評価内容・評価方法であればとんでもないことになりますから、到達目標を評価できるような評価方法・内容を考えなければいけないというのが一番大事ですね。成績評価の基準としての評価内容。

あと、受講上の注意事項ですが、これはルールですね。これも欠席とか遅刻、居眠りに関しては徳島大学でも厳しい先生は授業中に5分以上寝ると欠席とみなすということで、出席が足りなくなって受験資格がなくなるんですけど、そういう厳しい先生もいますが、中には“寝てる子を起こすな”と、騒ぐより居眠りの方が良いだろうということで、あまり厳しくない先生もいて、この辺は個人の先生によって変わると思いますので、この辺も書いておくと良いかもしれません。

追試験をやるかやらないか、前提とするスキル、これは「〇〇学Ⅰ・Ⅱ」とかですね、一応取っておかないといけないということをはっきり書いておかないと、関連科目をきちんと書いておかないと学生さんが戸惑いますからね。ミスマッチという風に言われて、授業を受ける時には、その前に勉強をしておかないと分からない。あと受講定員とかですね。

結局、シラバスを書く時には一番上に事務的な情報、その次に概要を書いて、目的・目標、授業計画・授業方法、授業方法の最後に注意事項を書いて、最後は成績評価になりますけど、成績評価を目的のところに入れるように細かい線がありますが、成績評価は目的・目標を評価するものだという風に捉えてください。

それで、これは文科省のホームページから調べたのですが、この23年版が一番新しい文科省のホームページの情報です。だいたい18年ぐらいから毎年文科省で作っているのですが、今平成23年度現在719大学、98%で全ての授業科目でシラバスを作成しているということで、最近は殆ど100%に近いぐらいシラバスを作っている。

但し下の方、全ての授業科目でシラバスを統一しているかということ、統一している大学は700ですから、徳島大学は遅れていて今年から全学の統一シラバスのガイドラインを今作成していて、今年中にはできると思います。鳴門教育大学がどうなのか分かりませんが、全国的にはこんな状況です。

それでは、ここでまた皆さんに個人ワーク、それからペアワークになりますけれども、今日は事前に先生方ご自分のシラバスを持参してくださいと連絡しておいたのですが、それはありますでしょうか。それで私が「シラバス評価シート」というのを皆さんのお手元に資料としてお配りしてありますが、その中に相手の先生のシラバスを見て、きちんと書けているか各項目が書かれているか、その辺のところをチェックして、後でフィードバックしてあげてください。

10分間ぐらい取りたいので、まず相手の先生のシラバスを見て、シラバス評価シートに相手の先生のシラバスを見ながら書いてあげてください。

〈シラバス評価シート〉……約9分間

それでは、そろそろ評価シートの記入を終えていただきたいと思います。それで、今から各グループの先生方がどんな感じだったのか、私が聞いてみたいと思います。挙手をお願いしたいと思いますが、今話しましたけどシラバスのポイントですね、例えば1番、ここでは授業形式が明記されているか、それがきちんと書かれていた先生は手を挙げてください。1-③のところです。

それで2番ですけど、授業の目的・目標に関して、一番大事なところはどうでしょうか。この授業でどんな知識・スキルが身に付くか、これがきちんと明記されていた方、ここも大丈夫でしょうか。目的・目標ではここが一番のポイントというか、この授業でどんな知識・スキルが身に付くのか。

それから、3番の概要では先ほど申しましたように、ディプロマポリシーとかカリキュラム上で自分の授業はどんな位置にあるのか、それが書かれている方、自分の授業はディプロマポリシーと関連があるカリキュラムの中でこういう位置にあるんだということが明確に書かれているか。少しここが弱いですね。概要のところ、分かりました。

あと、4番の授業計画のところ、これはどうでしょうか。目的と目標との整合性があるか、目的・目標を達成するために授業がきちんと計画されているか、授業計画がきちんとできていると思われるか。ここは結構、皆さん、きちんと書かれているようですね。

それから、裏の方の評価シート、7番の成績評価はどうでしょうか。先ほど申しましたけど、成績評価はどういう方法で行う、どういう割合・基準で行うのか、これがきちんと明記されている方、これは少し手が挙がらない方もおられますけど、ここは大事ですね。成績評価をはっきりしておかないと、どういう方法でやるのか、レポート・試験、その割合、どういう基準で行うということ、この辺は大事なので、その辺のところを全体におさえてシラバスを書いていただきたいと思います。大丈夫でしょうか。

それでは、残り時間が少なくなりましたが、次にパート2に行きたいと思います。グラフィック・シラバスについて概念的なことを紹介をして、皆さんに体験していただきたいと思います。結局、テキストのシラバスには限界があるという話なんです。これは授業全体の構造が伝わりにくい、文章で記載されたシラバスですね。

それで学問特有の知識が見たいということで、それがやはり学習者にとっては良いのではないかと、それをグラフィックしたものということですね。弱点を補強するためにグラフィック・シラバスを兼用するという、全国の大学でグラフィック・シラバスまではないですから、個人の授業でテキスト・シラバス、プラス授業の最初に自分の15回の授業を図式化するという風になっているということで、分かりやすいですね。

グラフィック・シラバスというのはフローチャートとかダイアグラム、図とか表ですね。それで系統性・関連性を図式化するということです。最初の考え方はコンセプトマップ、これは初等・中等教育でやられていて、私はあまり詳しくないのですが、初等・中等教育で使われている。知識を統合したり体系性を示すということで、図示することで理解が深まりますよね。

これは学問領域が全然違うので、直線的なものもあるし螺旋的なもの、様々なグラフィック・シラバスが考えられています。教員にとっては知識を組織化できる、学生にとっては図とか表で理解ができますよね。それから授業ごとにグラフィック・シラバスを付け足していても良いということで、

15回分作っても良いんですけど。

グラフィック・シラバスに関連した話なんですけど、今徳島大学でカリキュラムマップを作っていますけど、カリキュラムマップというのはいわゆるグラフィック・シラバスと似たような考え方だなと思ってご紹介するんですけどね。今、全学部がこのシラバスを作っています。

これは皆さんの資料の中には入れてません。まだ承認されていないので、来年度の Web に公開するというので今は作成中なので、この話をすると怒られるんですけど、各学科・コースでこういうカリキュラムマップを作ってもらっています。学習目標を立てて、その学習目標に到達するためにはどういう科目を取っていくかということですね。

先ほど、ここの先生の資料を見ると鳴門教育大学さんでもカリキュラムマップを作られているようなので参考になるかもしれませんが、学年進行もあるし学習目標ごともあるということで、結局グラフィック・シラバスというのはこんな感じですね。自分の15回分で各回がどういう風に関連しているのか、図で示していく。

これは、たぶん経済学のグラフィック・シラバスかなと思うのですが、これは直接的な感じですね。これは英語のオーラルスキルをリスニングとスピーキングに分けて、更にリスニングがノートテイキングとリスニング、スピーキングはプレゼンテーションとかですね。

これは私が作ったのですが、料理の調理法でこんなグラフを作ると面白いんじゃないかということで、色んな料理があるけれども料理の仕方で、学生さんに色んな料理を作ってもらおうんですが、調理法ですね。今日は何の料理を作りましょうという感じで、そうすると学生さんは次にどんな調理法で、どんな料理を作るのか分かるかなと思って。

それで、皆さんに今度はご自分の授業のグラフィック・シラバスをお試しで作っていただきたいと思います。どんな手順でやるのか、私がこのポストイットを持ってきましたから、それと A 3 の紙があると思います。ポストイットをお配りしますので、自分の授業でこれが大事かなという概念があると思います。それを書き出していただいて、こういうやり方を掲示法と言いますが、色々概念を適当に書いて、それをグループ別に分類していく。

それで色々たくさん出てくるとは思いますけど、厳選して絞り込んでいただいて、自分の授業の中でこういう内容・項目が大事だということで、それを教えていく訳ですが、その順番とか関連性を今からグラフ化していく。分類して、それで見出しを付けて、それが1回分の授業になるので、それが次に発展していく。

それで、意味のあるように整理しなければいけませんね。自分なりに見出しをつけて、それが上下関係なのか流れていくのか、どういう流れになるのかを整理して完成ということなので、ここは一応個人ワークで今から20分ぐらいありますので、グラフィック・シラバスを作ってみてください。

〈グラフィック・シラバス作成〉……約20分間

それでは、残り時間も少なくなりましたので、どなたかご自分のグラフィック・シラバスを披露していただきたいと思います。それでは担当学科の先生から、グラフィック・シラバスを2～3紹介していただきたいと思います。

英語科

「英語の音声学のシラバスを図にしたものですが、英語の音声学では小さい音の単位から進めていくので、1個・1個の音の発音から単語での発音、文の中でのリズムというのを図で示すと、こんな感じになるかなということで、上に英語・学習・言語というものを書いて、授業の中では日本語の音の特徴と比べながら、その影響を見ているので下にも同じく言語の体系がそれぞれにあるという感じで作りました。」

英語科はこんな感じで、あと社会科の先生、お願いします。

社会科

「社会科の梅津です。私の書いたのは中等社会科教育論です。学部の1年生の後期の授業ですけれども、基本的にこの授業は学生の今持っている社会科観を相対化させるというのが狙いで、まず学校・教員・子ども、一番こっち側ですけれども、現在の学校・教員・子どもを巡る状況、社会変化・社会的要請、あるいは学問の進展等を踏まえて、自分たちが社会科をずっと学び教わってきて、これから教員になろうとする訳だけでも、どういう社会科観を持っているのかというのをまずディスカッションします。

その上で講義ですけれども、社会科とはいったい如何なる教科か。どういう目的や成果を持った教科なのか。これは硬い言葉で言うと“教科観”と言いますが、それを論じて授業の組立てに関わる目標・内容・方法・評価、これを論じます。その後、具体的にビデオとかを活用しながら授業の実際を見ます。

教員の側は類型を意識していて、いわゆる自己解説型、共感的理解型、探究型、意思決定型とか、社会科でいう代表的な授業のタイプをビデオ映像等々で見まして、先ほどのように無線等を使いながらそれぞれの授業の特徴と課題を明らかにしつつ、自分が持っている社会科観とか、常に問答をさせるような形で意見交換をしています。

そして最終盤で、じゃあ一体自分の社会科観はこれらの15回の講義を通じて、どういう風が変わったのか。変わらなかったとする部分は何故、何が変わらなかったのか。変わったとすれば何故、何が変わったのかということディスカッションしてまとめるというような授業になっています。以上です。」

これを見ると、このグラフィック・シラバスがあると、学生さんが文字だけではなくて授業の流れが分かって、これはかなり学生さんの理解に役立つのではないかと思います。それではもう時間がないので、そろそろこの辺で私の講演は終わらせていただいてよろしいでしょうか。皆さん、ご協力ありがとうございました。今後、シラバスの作成に役立てば良いと思います。それでは、これで終わります。どうもありがとうございました。

(司会) 宮田先生、どうもありがとうございました。もう時間も殆どないのですが、少しだけ質疑の時間を取りたいと思います。ご質問のある先生がおられましたら、挙手をお願いします。

(立岡)

先ほど途中にも出たことで、今日は全くご説明いただけなかった問題があるかと思うのですが、徳大の学生はシラバスを読んでいるのでしょうか。

(宮田)

そこまでは把握できていないのですが、たぶん読んでいると思います。

(立岡)

以前、頂いた時には殆ど読んでいなかったように覚えているんですけど、先ほど何人か仰っていましたが、私自身も多くの学生が読んでいないだろうという感じを持っておりますけれども、徳大生が読んでいるのは何故なのでしょう。

つまり、良い書き方をすれば読むという理屈は、じゃあ何で読むようになったんだという問題を飛び越えてしまっている。徳島大学ではかつて読まなかったらしい学生が今は読んでいるのかという、如何にして学生が読むようになったのか。あるいは主体的な学習をするように教えなければ主体的な学習ができない学生が、なんで主体的にシラバスを読むようになるのかということだろうと思います。

(宮田)

選択科目なんかを選択する場合はたぶん読んでいるし、必修の場合も徳大で調査をした学生調査から言いましたけれども、たぶん読んでいる学生さんもいる。もちろん中には読んでいない学生もいますけど、全員が読んでいるとは言いませんけど、私の感覚では読んでくれていると思っていますけどね。「なぜ読むようになったんですか?」やはりきちんとシラバスの冊子も作っているし、そこで読んでくれていると思うので、「なぜ?」と言われると分かりませんけれども。

(司会) よろしいでしょうか。他にご質問等ありましたら、お願いします。

(西園)

最後にグラフィック・シラバスをご紹介いただいて、それぞれ作業を行い、2つの例が出た訳ですが、これについては日本の中ではどの程度、浸透しているのか、その辺はどうでしょうか。

(宮田)

これは私も元々のソースと言いますかね、それは愛媛大学の佐藤先生という方がおられるんですが、アメリカではかなり浸透しているみたいですね。佐藤先生が言われているのは「日本のシラバスはシラバスじゃない」と仰っていますが、ということでおそらく日本では殆ど浸透していないと思います。まだ実際に各大学のホームページとか冊子でも、グラフィック・シラバスを掲載しているところはないと思います。

(西園)

私がなぜ質問をしたのかというと、非常に重要な方法であるということ、つまりそれぞれの学問分

野の知識・概念を学生が分かる形で“見える化”する。そこで、今ありましたけれども何を学ぶのかということが明確になっていると、学生はそのシラバスを読むだろうということが期待できるというように思います。

(宮田)

ですから先ほど申しましたように、カリキュラムマップと似ているんですね。カリキュラムという科目がどういう構造になっているのか、グラフィック・シラバスは各先生方の講義がどういう構造になっているのかということを図式化するということが、学生さんのためにもなると思いますけど、まだ日本ではね。今から普及していけば良いと思うのですが。

(梅津)

ご講演ありがとうございました。1点、質問させていただきます。先ほどグループワークで「シラバス評価シート」を作って、互いのシラバスを点検・評価したのですが、このシラバス評価シートは先生がお作りになったもので、評価項目が10あるんですけども、これは大学としてシラバスの枠組みとして持つておくべきものと、教員が個人で努力をし考慮して書くものとか、おそらく峻別できるのではないかと思ったんですけども。

つまり、シラバスというのはある意味、決められた形式ですから、その形式の中にこの10項目が入っていた方が望ましいのか、それとも極端な話、形式がどうあっても個人としてこういう情報を書き込んでいくということで良いのか。もし形式のことであれば、大学でも議論をして、今あるシラバスの枠組み自体、項目それ自体をもう少し改善していった方が良いのではないかとこのことを質問させていただきます。

(宮田)

一応、徳島大学でも今年「シラバス作成ガイドライン」というものを作ろうとしているのですが、私が作成したのはある程度、内容をピックアップしたもので、全部を網羅しているということではありません。ということで、各先生で作られても良いかもしれませんが、もし大学で統一したフォーマットができて、それで評価するシートを作られても良いと思います。

(山下)

今日はどうもありがとうございます。一番最初の立岡先生のご指摘、私は非常に大事なところだと思うんです。むしろ宮田先生というよりも、本学の教員の先生方にどなたか答えていただければと思うのは、シラバスを読んでもらいたいと思っておられるのか、まあ別に構わないと思っておられるのか。

そして、もし読んでもらいたいと思っておられるなら、私の時はこんな分厚い冊子で教員の方も他のを色々見て、「この先生はこんなことをするのか」みたいなことでしたけれども、冊子がなくなると私もきつといちいちチェックとか見ないと思うんですね。

それはちょっと置いておいて、もし読んでもらいたいと思われるなら、何か手立てを講じておられる、私はこんな手立てを講じて読むように工夫していますという方がおられたら、申し訳ないで

すけれど本学の教員の方に、どなたか答えていただければと思います。

(司会) 本学の教員の中でということなんですけれども、如何でしょうか。

(佐伯)

佐伯です。今日、お話をお聞きしていてシラバスと、私は授業の最初の1時間目にオリエンテーションをするんですよね。その違いがよく分からなくて、おそらくオリエンテーションの中で色んなこと、先生が今日言われたことを説明して、それでもってこの大学では履修の取り消し期間がありますので、もし学生が合わないと思ったら履修を取り消す。オリエンテーションのところで網羅できるのではないかと考えています。以上です。

(司会) ちょっと時間の関係があるんですけど、どうでしょうか。

(成川)

私の場合は1時間目の時に学生に対して「成績評価をどういう風に行っているのか、ちゃんとシラバスに書いてあるでしょう」という風に、それぞれの項目に沿って学生に対して「シラバスを見てください」というので一応確認はしております。1時間目の一番最初にオリエンテーションという形で「シラバスにきちんと記載しているでしょう」という風に再確認しています。

(司会) よろしいでしょうか。

(山木)

ちょっと時間がないので質疑応答をしていると相当時間を食いそうなので、感想と意見ということで、インストラクション型の自動車教習所みたいな場合は契約という要素が非常に強くて、ということが出来るようになったかという到達目標に着くために最も効率の良い方法論ということですが、アクティブ・ラーニング的なものを質的なものに持っていった場合、色々な個性ある学生が受講生として入ってきた場合、必ずしも15回の展開どおりにきっちりやらなくても良いのではないかとこの風に思っているんです。

要するに、その受講生たちの関心とか水準とか経験値、そういうものによってかなり我々も目標自体も、もっとここまで伸ばせるとか、それからこういうことを学ぶにはもう少し時間を費やした方が良いということで、ある程度フレキシブルな可変性というものが大学教育の場では必要なのではないかなという風に思っています。

ですから、先ほどご説明にあった部分で、シラバスは何のためにあるのかということも授業の中で出てきましたけれども、最初のシラバスというところがそれはそうなんですけど、それを踏まえつつもあまりに強調されすぎてしまって、シラバスに準拠しているかどうかだけが学生の評価ポイントになってしまいますね。我々が目指そうという高等教育の質的な保証というのが。

ですから、申し上げたいことはシラバスの次の次元に大学が突き進むならば、可変性みたいなものをどういう風に取り込み、そしてそれを受容できる学生による授業評価というような次元へと、そろ

そろ移行すべきではないかなという風に思います。以上です。

(司会) それでは宮田先生、今の本学の議論を聞かれて一言、何かありましたらお願いします。

(宮田)

シラバスは一応、授業の前に書くのは書くんですけど、やはり実際の学生さんの状況に合わせて変えても私は結構だと思います。ですから一応最初にシラバスがないと学生さんは分かりませんからね、その授業は一体何なのか。それは書くのですが、実際に先生がその通り行うかというのは、先生の判断で変更したりできると思います。その場合はまた学生さんに新しいシラバスを提示して、「君たちの状況に合わせて、ちょっと変えるからね」というのは、そこは行っていただきたいと思います。以上です。

(司会) それでは、これで宮田先生の講演を終わりたいと思います。改めて大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

それでは後半です。本日は2部構成になっておりまして、後半は4つの発表があります。時間も押しておりますので、3時15分から行いたいと思います。それまで少し休憩を取りたいと思います。

本日お配りしたプリントの中に、SPODの派遣プログラムのアンケートが入っていたと思うんですけど、皆さんこれは全員回収したいと思いますので、必ずお書きいただきたいと思います。よろしくをお願いします。それでは、宮田先生がご退席されます。

〈休憩〉……約4分間

【発表】

(司会) それでは、まだお戻りでない先生もおられますが時間も押しておりますので、後半の4つのご発表の方に移っていききたいと思います。1人10分ほどの発表ですので、よろしくお願ひしたいと思います。それでは、まず梅津先生、よろしくお願ひいたします。

① 「カリキュラム・ガイドブックの開発と活用ー“協働するFD”の推進にむけてー」

(社会系コース 教授 梅津 正美)

失礼します。社会系コースの梅津です。私の発表は文部科学省の特別経費、それから今年度につきましては学長裁量経費を頂いて、カリキュラム・ガイドブックの作成を協議会で進めております。

本日の私の発表は「カリキュラム・ガイドブックの開発と活用」というテーマで、副題に“協働するFD”の推進に向けて、というテーマを掲げさせていただき、協議会で検討している内容、そしてガイドブックの第2次試案というのを作成中ですので、その経過報告も含めてお話をさせていただきたいと思います。

先ほどのシラバスに関わるご講演の内容とも直接関わりますけれども、大学の質保証ということが言われます。その大学の質保証を捉える視点として、大きく3つのことが言われます。用語だけ説明します。学習成果主義、プログラムに基づく教育、そしてステークホルダーに対するアカウントビリ

ティ（説明責任）ということです。

本学におきましては、これまでも教員養成教育改革の中で質保証のために様々な手立てを講じてまいりました。簡潔に言いますならば、学部のカリキュラムの場合、教科の授業力をコア能力とする教育実践力の育成を目指すコア・カリキュラムの編成と、それを基盤とした自己省察型教員養成プログラムを開発し、それを実践することに平成17年以来、取り組んでまいりました。

このプログラムを構成する主要な要素として柱立てが4つありまして、1つは教育実践力の評価基準を作ること。それは教員としての資質能力スタンダードやコア科目に運用されております授業力評価スタンダードのルーブリックなどがあります。カリキュラム編成におきましては、教育実践学を中核とした教員養成コア・カリキュラム。

養成教育における授業・教育内容の構造化・焦点化・可視化ということに関しましては、今日のお話の中心を成しますけれども、「カリキュラム・チェックリスト」、「カリキュラムマップ」、それらを統合した形の「カリキュラム・ガイドブック」というものを作成してきております。

そして4番目、授業力形成の自己省察を促す授業実践と評価活動に関しましては、コア科目の実践とそれに連動するところの授業力ポートフォリオ、いわゆる「学習キャリアノート」を作成し、評価活動に活かす。自己省察を促すということをやってきております。まず、この本学の教員養成カリキュラムの全体構成をご理解いただきまして、本論でありますカリキュラム・ガイドブックの趣旨と構成について話をさせていただきます。

文科省の特別経費を受領いたしまして過去2ヶ年、つまり平成24年・25年におきまして、このようなエンジ色の「カリキュラム・ガイドブック（第1次試案）」というものを作成してまいりました。これにつきましては先生方のお手元に1冊・1冊、お配りしてあると思っておりますので、ぜひ見ていただきまして今日のFD全体会を経た後に、また2次試案の策定に取り組みますのでご意見などを頂戴できればありがたいと思っております。これが第1次試案の概形となっております。

そもそも、カリキュラム・ガイドブックと言われるものは、どういう主旨をもって作っているかと言いますと、端的に言いますとこのブルーのところでありまして、本学のカリキュラムを通して学生が何をどのような順序で学び、その成果として何ができるようになるかを大学として説明責任を果たそうという主旨の下で作られているのがガイドブックです。

そして、そのガイドブックの内容を構成しておりますのは、4つの大きな柱立てがありまして、1つは教育の目的に関わる部分でありましてディプロマポリシーと教員としての資質能力スタンダードというのが関わっております。先生方、申し訳ありません。お手元に私の発表資料としてパワーポイントの資料と合わせて、別刷りの別冊資料を用意していただいております。

この別冊資料の表紙を1枚めくっていただきますと、ガイドブックの第2章にあたる「カリキュラムマップ」というのが出てまいります。これは今日ガイドブックを直接お持ちいただくことをお願いしておりませんでしたけれども、この別冊の資料の方で少しガイドブックの内容について参照しながらお聞きいただければと思います。柱立ての2つ目は、今見ていただいている授業の体系的・系統的、それから学習の順序性を示した「カリキュラムマップ」です。

それから3つ目として、授業の到達目標とその重点を書き込んだ「カリキュラム・チェックリスト」、カリキュラム・チェックリストのイメージはこの別冊の資料を1枚めくっていただきますと「チェックリストモデル」というのが出てきまして、第2節「全学共通科目・教養科目」というのが出てきま

すけれども、サンプルとしてこれを見ていただきますと、これがカリキュラム・チェックリストというものになっています。

今の4つの柱立ての下で、この辺は端折らせていただきますけど、ディプロマポリシーは4つの柱立ての下に本学としての教員としての資質能力が到達目標の形で書き込まれています。そしてカリキュラムマップですけれども、もう一度1枚、2枚とお戻りいただきまして、表紙1枚めくっていただきました第2章「カリキュラムマップ」のところを見ていただきたいと思います。

この表面に、カリキュラムマップのうち本学のカリキュラム全体を説明したもの、それから裏面におきましては各コースのうち社会科教養コースを例示したものが重なっております。カリキュラムマップというのはどういうものかと言いますと、簡潔に定義しますと学生たちに学習内容の順序性と授業間の関連性を明示したフローチャートであります。

これがあることによる意義は、目標ベースでカリキュラム編成を可視化することができるということです。学生の立場に立ちますと、各授業を履修・学習していく順序が理解できます。また学生が授業間の関連性を理解することができます。それから社会系のコースを例示しましたカリキュラムマップということになります。

次に、「カリキュラム・チェックリスト」です。カリキュラム・チェックリストは先ほど見ていただいておりました全学共通科目・教養基礎科目の部分、これを見ていただくと良いかと思えますけれども、カリキュラム・チェックリストは横軸に教員としての資質・能力スタンダード、到達目標の形で書き表された5つの柱立てによって示された教員としての資質・能力スタンダードが列に置かれています。

そして、行には各授業科目、教養科目とかあるいは専修専門科目とか、それぞれの科目が先生方お一人お一人のご担当のものが書かれておりまして、これは先ほどのご講演にシラバスの話がありましたが、シラバスに授業の一般目標と到達目標が書き込まれます。この授業の一般目標・到達目標を踏まえて、とりわけディプロマポリシーを実現するために重要と思われるものに◎、重要と思われるものに○、関連する事項であるというものに△の記号を与えて記載していただいているところです。

このカリキュラム・チェックリストは、このカリキュラム表の例えば教養とか専修専門科目、そういったカテゴリーごとに能力ベースでこの記号が記されることによって、学生にとって身に付けなくてはいけない資質・能力の視点に各授業の関連や重点が分かる。学生にとって身に付けなければいけない資質・能力を視点に授業の履修の根拠や選択基準が明確になるというメリットがあるという風に考えています。

時間の制約がございますので、今協議会の方で取り組んでいる修正点をかいつまんで説明させていただき発表を終えたいと思います。キャリアノートについても、後で触れさせていただきたいと思います。別冊資料の表1枚目を見ていただきたいのですが、今協議会の方で話し合っておりますのは、向かって右側が第1次試案のガイドブックの内容構成になっております。

とりわけカリキュラムマップと接続するカリキュラム・チェックリストのところなのですが、第1次試案におきましては教養基礎、教育実践、コア、教職共通科目、専修専門科目という形で、どちらかというと教養の体系に基づいてカテゴリーを分けて、このチェックリストを作るということをやっておりました。

しかし、協議会で議論をする中で学生さんたちがこれを実際に活用して自分の授業を省察し、自分

に身に付いた能力を振り返ろうとした時に、どういう順序が見やすいのだろうか、こういう議論をした時に向かって左側、第2次試案にありますような改善案を今考えております。

まず最初、赤いところに注目していただきたいのですが、ここ「共学共通」と書いてありますが「全学共通」でした。申し訳ありません、お直してください。第2節の部分ですけど、まず全学共通科目を配置した後はマップと連動するように専修コースそれぞれのチェックリストを掲げるようにして、この体系・順序性を表しているカリキュラムマップと、それぞれのコースで学ぶことのできる授業の能力というものを結びつけて学生が見られるように配慮して、今再構成しようとしています。

そして形式は、今先生方にお配りしているような紙媒体の冊子固定型のものでなくて、バインダー式の形態のものを今考えておまして、学生たちが自分の授業を省察するために必要となる部分を抜き取って、使いやすいような形で使ってもらおうというような形式を考えております。

最後の話になります。時間の制約からまとまりのない話になってしまいましたが、最後の1枚の話なんですけれども、やがて先生方のお手元に「カリキュラム・ガイドブック（第2次試案）」を完成させてお配りする予定にしております。

本日のFD全体会との関わりで言いますと、これからのFDは例えばこういったカリキュラム・ガイドブックを見ながら、本学のカリキュラムを俯瞰しつつ自分のコースの授業、自分の担当する授業、それがどのように位置づいているのかということ、とりわけ能力ベースで一体このコースで学ぶと学生たちが卒業時にどういった力、どういった資質・能力を身に付けて卒業させることができるのか。

そういう、まさにラーニング・アウトカムという考え方に従って、自分の授業と仲間の授業、自分の授業と大学全体のカリキュラムというのを俯瞰しつつ、そして1人で考えるというよりもコースで、コースで考えた上で全学でという形で、まさにこれからは大学の教職員が互いに協働して進めるFDというのが、FDの発展形として必要かという風に考えております。以上で発表を終わります。

(司会) ありがとうございます。質疑の時間を最後に少し取れると思います。その時に質問がある方はお願いしたいと思います。続きまして、森先生の方に「学修課題で学生に伝えたいこと」ということで、ご発表いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

② 「ピアノの実技指導において、学修課題で学生に伝えたいことー入学までのピアノのレッスンと大きく違うことはー」

(芸術系コース〈音楽〉 准教授 森 正)

よろしくお願いいたします。森です。かなり場違いなところに座っている感じがしておまして、それでたぶん私のことが不安だったのか、音楽コースの先生方の出席率が比較的良いなど、サポーターが多いなということで心強く思っています。

何でこんなところに今日私が座ってしまったかと言いますと、ある日突然、西園理事の方から電話がありまして「森さん、頼むよ」と、それで何故か西園先生に「森さん、頼むよ」と言われると、「いやだ」とは言えない不思議な空気感があるようでして、お引き受けしてしまいました。

学修課題について何か話をしてくれということでお話を伺った時に、たぶん自分以外の先生も学修課題について少しお話をされるのかな、だったら自分は少し自分が担当しているピアノの実技指導の特異性というか、ちょっと他の先生方の授業とは違うんですよというところを中心にお話させていた

だければと思っていたんですけれども、プログラムを見ると私1人ということですので、その特異性のみを今日は少しお話しさせていただきたいと思います。

学修課題という形で私が学生に書かせて、学生に読んでほしいなと思って書いてもらったものです。お手元に「ピアノ基礎Ⅰ」「ピアノ基礎Ⅱ」「ピアノⅠ」「ピアノⅡ」、4つのシラバスが表・裏で届いているかと思います。そこの学修課題には、学生さんはこういうことを出来るようになってほしいということを書いてある訳なのですが、決してこれは実は内容としては難解なものではありません。学生にとっては「えっ、そんなこと当然だよ、大学なんだもんね」ぐらいのことを言いかねないかもしれません。

ここに書いてある学修課題、全部の授業がそうなんですけど、1つの特徴は自分でできるということです。自分で楽譜が読める、自分1人で練習できる、自分1人で正確なテンポを持することができる、このぐらいの内容しか書いてありません。ただ、「これはもうできます」という学生はいるかもしれませんが、とても大学レベルの授業としてはそれが出来ているとは言えない状況です。

実際、どんな形で私の授業が行われているのか少しご説明させていただきますと、私の授業殆ど全てが、ここにおられる先生の授業とは違いまして研究室で行っています。どうしてもピアノが2台並べて置いてあるという状況が必要不可欠ですので、そのようなことが可能になっているのは研究室だけになっております。幸い研究室が少し広めの部屋ということなんですけれども、ほぼ半分がピアノ2台にスペースを取られております。

残りのスペースに机があったり、応接セットがあったりという形になると思いますが、そこに大体多くて5～6人の学生が入ってきて授業が行われています。ただ授業の対象となるのは、やはりピアノの前で実際に弾いている学生が指導の中心となる訳です。後で少しお話ししますが、授業の対象はピアノの前に座っている学生ということになります。

もう1つの大きな特徴というのは、他の授業のことはよく分からないのですが、大学でのピアノの実技指導と、この大学に入ってくるまでの学生のピアノの経験状況の違いというか、実は機会があったら聞いてみたいなと思っていました。実は自分は昔ピアノを習ったことがあるんだよという先生、手を挙げていただけますか。音楽の先生は当然ですけど、意外な先生が手が挙がっていますね。

実は今自分の家族が習っていますという方、いらっしゃいますか。自分の家族がピアノを習っている、子どもとか、あまり居ないんですね。今たぶん手を挙げてくださった先生方のピアノのレッスンというのは自宅近くのピアノの先生であったり、または最近よくあるのが楽器店が経営しているピアノ教室とか、そういうところで行われるレッスンだと思います。

実際、この大学に入ってくる学生も入学までのレッスンは大多数がそういうところでのレッスンになります。ただ、そのレッスンとこの大学のレッスンは大きく違うんだよということを、どうしても学修課題等で言い続けることが必要になります。それが先ほどお話しさせていただいた1つ目の自分でできるということです。

音楽教室とか個人のピアノの先生のところのレッスンは、どういう感じで行われているかと言いますと、習っている子どもたち、習っている生徒たちというのはたぶん殆どが言われたとおりに弾けば良い。先生が教えたとおりに弾けば良い。先生がこういう風に練習してきてね、と言われたことを1週間繰り返す。それができるようになれば先生が誉めてくれて、○を付けてくれる。たぶん大体の

レッスンはこういう形で行われています。

学生も実は大学に入って、そういうレッスンだと思っている訳です。「ああピアノのレッスンなんだから…」ぐらいの感じで、割りと小さい頃から自分が受けてきたピアノのレッスンを頭に思い描いているようなんですけど、それはちょっと違うよという話になる訳です。どう違うかという、まず最初に「何をやってきたの？」というところから始まります。

例えば「今日これからピアノを弾くけれども先週とどこが違うの？」という質問をする訳です。今ちょうど始まったと思うんですが1年生の後期でこんなことを言われますと、だいたいの方が「えっ？」という感じになります。「1週間ずっと、ただ弾いていただけ？」と言うと「はい」、「先週と同じピアノを弾くんだったら俺も先週と同じことを言うよ」という話になります。

こういう学生のイジメみたいな感じになってしまう訳なんですけど、ここからスタートして次第に慣れてくる。2年生・3年生になると用意してきますね。森先生に聞かれたら、こういう風に答えよう。こういうことをやってきました、上手くできるかどうか分かりませんが、こういうことを考えて1週間練習してきましたと、平気でこういうことを言います。

ただ、こういうキャッチボールが始まると初めて大学の授業として成立するのかなと、あくまでも学生が先にボールを投げてくれと、学生が1でも良いから何かをやってきてくれれば、だったらこういう風なことをもう少し頑張って練習してみたら？とか、それで上手くできないんだったら、少しこういう風に練習をしてみたら？という形で、こちらは話を続けていきます。

あくまでも第一歩は学生の練習から始まります。ただ、なかなかそれが上手くいかないというのが1年生後期の実情だと思います。これがもう少し時間が経ってきて言葉のキャッチボールなどを進めていくと、学生も少しは慣れてきて自発的に色々なことを考えていくようになっていきます。

何故こんな小さい時に、というか大学に入るまで、ある意味では子どもたちを非常に子ども扱いしたようなレッスンが行われているのか、これがやはり今の日本のピアノ教育のとても大きな問題点になっています。これをなるべく大学には持ち込まないようにということで、今のようなキャッチボールをする訳なんですけれども、もう1つ実はシラバスの学修課題の特徴としては演奏を分析することができるということです。

演奏を分析して、それを言葉にすることができるかどうか。実際これは教育実習、実地教育において、小学校・中学校で子どもたちの合唱とか器楽合奏、そういうものを聴いた時には絶対必要になる訳です。子どもたちの合唱を聴いて「ああ良かったね、もう1回やってみようか」と、これだけではとてもじゃないですけど授業としては成立しません。

子どもたちの合唱を聴いて、「良かったね、でもこここのところはこうだから、もう少しこうしてみようか」、分析して言葉にしてより良いものにしていくということが非常に必要な能力になってきます。それを自分のピアノの演奏でもらうということです。その第一歩が「先週のピアノとどこが違うの？少し話をしてみよう」ということから始まります。

これが少し進みますと、実際に自分の演奏を録音して聴いてみてもらって、「どう？今自分の演奏を聴いてみて、弾いたつもりかもしれないけど実際の聞こえとは違うよね」、こういう風にその場で演奏を分析するということになります。これが更に進みますと、先ほどお話しましたように複数名が研究室に入りますので、友達の演奏を分析させる。「今の演奏を聴いてどうだった？ちょっと分析してみて良いところ、悪いところを一つひとつ話をしてみよう」という形になります。

そうすると、大体みんな友達を慮って良いことはバーッと言ってくれて、「直した方が良いところはないの?」と言うと、「うーん」とか言って黙ってしまう訳なんですけど、そういう時は「レポートに簡単でいいから書いてきてね」と言う、かなり思い切った「お前、自分ではできるのかよ」と聞きたくするようなことまで書いてくる。

それで他人の演奏を分析する、分析して言葉にするという能力が身についてくるようです。この能力をやはり身に付けさせることが音楽大学とは違うという、この大学の1つの特徴なのかと思っ
ています。音楽大学の場合にはあくまでも試験での演奏、一発勝負で評価が決まります。

自分のことなんですが、とにかく年1回のピアノ試験というのは、これの半分弱ぐらいの部屋にピアノが1台ポツンとあって、怖い先生方がズラッと並んでいて、シーンとしていて重い空気を掻き分けかきわけしながら、やっとの思いでピアノのところに辿り着く、足は震え手は震え、もうポロポロになる訳ですね、その緊張感の中で。

そうすると、いくら練習や毎週のレッスンで上手く弾けていても、ポロポロになってしまえばそれだけの評価しかしてもらえない。挙げ句の果てには、「お前、精神力が弱いんだろう。俺にでも打たれてこい」と、毎回試験の後に言われるような気の弱い私だった訳ですけども。

そのような試験や評価がこの大学で成り立つ訳ではありません。もちろん試験での演奏も評価をする訳ですけども、シラバスの評価のところに書きました。普段の授業についてということで、これは先ほどお話ししたように自分の演奏、他人の演奏をどの程度分析して言葉にできるの?ということ
を問い掛けています。

最後に、何でもこういうことをやっているのかという、もう1つの特徴は先ほどお話ししたように、この学生は実はピアノの演奏能力は多種多様です。かなり弾ける生徒から、そうでない学生が一緒に授業を受けて試験を受ける訳です。そうするとやはり難しい曲で試験を受けた学生の方が点が良くなってしまう。それは結局、入学までのピアノのレッスンとか、どんなコンクールを受けてきたかという、そこで既に評価が決まってしまうということになる訳です。

ですから、殆どの学生が新しくこの大学に入ってから勉強する、分析する力とか言葉にする力ということ
を評価の対象にしてあげないと不公平な形になるのかなと思、そのようなことを学修課題に書いております。時間が少し超えてしましまして、すいませんでした。言葉化するという
ことでお話しさせていただきました。

ただ、誤解していただきたいくないのは、これはあくまでも指導する時にはそれが
必要だよということで、音楽そのものを言葉にするということは別だと思ってください。最後にちょっと生意気ですけど、作曲家のショパンが音楽の3つの定義というのを書き残して
おりますので、それを紹介して終わりにしたいと思います。

ショパンによる3つの定義、①音による感情の表現、②音によって思想を表現する、③漠然とした言葉、それが音楽である。ショパンはそういう風に音楽を定義づけています。私も
そういう風に思っています。今日はこれで終わらせていただきます。

(司会) ありがとうございました。それでは引き続き、3つ目のご発表ということで「教科専門テキスト『算数』を使用した授業の検証」、佐伯先生よろしくお願
いいたします。

③ 「小学校教科専門科目テキスト『算数』を使用した授業の検証」

(自然系コース〈数学〉 准教授 佐伯 昭彦)

失礼します。私も突然、西園先生から電話がありまして、何故かここに立っているという次第であります。よろしくお願いします。

今日お話しするのは、算数という科目で松岡先生の教科専門の教科書を元にした授業です。それと聖徳大学で7月に授業をさせていただきましたので、その結果を合わせて報告いたします。

まず、テキストの概要ですが算数と数学体系とのつながりを主にしています。作成方針としましては教科内容に従ってということですが、まず数学の理論と算数の内容を併記する。まずここに数学の掛け算の定義が書いてあって、その下に算数のやり方が書いてある。あと学習成果主義を取るということですが、実際にこの教科書に空欄がありまして、ここに学生が用語や解答を書いていく。

更に、実際に証明問題を解くというところも、実際に解いてもらうんですけど、なかなか解けないのですが最終的には私が説明して書くということになっています。これは前期で91名の学生の皆さんにこのテキストを使いました。あと内容としましては、学生がよく理解できていない、正しく認識できていない内容を教科書の主体としました。

それで今回、先ほど言いましたように聖徳大学で「位取り記数法の仕組み」を、よく50分間の授業をしますので、実際に小学校1年生でこういった十進位取り記数法のところをやるんです、このように教科書では具体物の鉛筆を使ってですね。これが数学的にどういうことなのかという授業をした訳ですが、十進法というのは皆さんよく使っていて学生さんにとっては当たり前になっている。ですから少し変えて二進法で攻めようということにしました。

それで、実際に二進法というのは高校の教科書では言葉で書いてあったり、数式で書いてある。そのような授業をすると学生さんは寝てしまいますので、ちょっと工夫をしました。どういうことかと言いますと、ここに「図的・操作的表現を用いた」とありますが、要はこういったパネルを使って行いました。実際には聖徳大学で7月2日、1年生70名、二進法を高校時代に学習したのは3分の1、そのうちで二進法を記憶しているのは3分の1、その程度の学生さんを対象にしました。

実際に今お話ししたように二進法と十進法を併記して、言葉とそしてタイルを貼って説明をしました。それでタイルを白板に1枚ずつ小さいものを貼って、2つになると2つ合わせて位を上げる。その後実際に演習問題として十進法の5, 6, 7, 8, 二進法の時にどうなるかということを学生さんに問い掛けました。

次に、二進法を十進法で表す計算方法をタイルと記号、数式を使って説明して問題を解いてもらいました。その後今度は逆に十進法を二進法で表す。よく高校の教科書では、11を二進法で表す時は2で割って5あまり1とか、そういう風に割って行って最終的に後ろから $1 \cdot 0 \cdot 1 \cdot 1$ が二進法であるということを使うんですが、何故そうなるのかということは、なかなか分かってもらえない。

それで、言葉での説明とこのタイルを使って実際に11個のタイルを白板に貼り付けて、2で割るということは2つのタイルを5個作って、余った1を1の位にもってくる。この5をまた2で割るということは4のタイルが2つあって2のタイルが1つ余るので、こんな風にしてタイルを使ってやるということですね。その後実際に100とか332を二進法で表せという演習をやりました。

それで何故こういうことをやったかと言いますと、実際に小学校の教科書では、例えば100本以上の鉛筆があるんですけど、これを10の束を作って、先ほどの計算方法と同じようにして、絶対こん

なことはしないんですけど、112を10で割ったら11の束ができて、2本余ったから1の位は2、更にこの11の束を10で割ると100本の束が1つできて10の束が1個、これは先ほどの二進法でやっていることと全く同じなんですわ。

ですから、ここで二進法でやっていることと十進法の数の仕組みは全く同じであることを理解してもらおうということが目的でした。更に今度は足し算です。これは時間がなかったので実演をしたのですが、今日はホワイトボードがないのでパワーポイントで示しますと、例えば1と1を足して実際はこうなりますね。ここにタイルが1個しか入らないから、この2つをどうしたらいいですか？ということで学生さんに聞くと、隣の位に繰り上がるという答えが返ってきました。

更にまた足して、ここに2つ入りませんでどうするかというと、やはり繰り上げて、こんな風に順々にやっていく。これも繰り上げて最終的に、この計算方法が3年生の教科書に書いてある十進法と同じ仕組みであることと、この時に学生さんに「例えば今のは二進法でやったけど三進法、四進法でも全く同じことになるよね」ということは確認しました。

結果ですが、70名のアンケート結果ですが、よく理解できたというのが56名で75.7%、いつもと違った視点というのが同じく56名で75.7%。それで実際に自由形式を見ますと、私は十進法というのは当たり前知っていることだと思っていたのですが、学生のアンケートをよく見ると「十進法をはじめて習った」とか、「初めての授業だった」とか、ちょっと二進法も入っているんですけど「十進法、触れたことがなかったので難しい」ということで、少し意外でしたが、こういう自由記述が11名。

それと、次にタイルを使った指導法の良さは「タイルを使うと分かりやすい」とか、「想像しやすい」とか、「使って説明したくなった」という風にして書いてくれたのは16名でした。数学と算数のつながりということを書いてくれた学生の人は「十進法と二進法の解き方は小学校でやってきたことと変わらないということに気付かされた。小学校の勉強が将来につながる」という風に、こういう良いことを書いてくれた人が、私が特別そういうことを言った訳ではないんですけど12名。

ということで、私がやった意図をきちんと把握してくれた学生がたくさんいた、そういう成果がありました。それで課題ですが、このテキストでは算数と数学を両方やっていますのでちょっと時間が掛かってシラバス通りには進まないということです。以上で発表を終わります。

(司会) 佐伯先生、ありがとうございました。それでは4つ目です。「教職大学院におけるFD実施状況の報告」ということで、今回の1つの試みとして教職大学院で行われているFDについて、小坂先生の方にご報告いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

④ 「教職大学院におけるFD実施状況の報告」

(教職実践力高度化コース 教授 小坂 浩嗣)

先生方、長時間になりましたけれど、もう少しご辛抱いただきたいと思います。私は教職大学院の小坂と申します。大学全体には自己点検・評価委員会がございますけれども、その下に教職大学院自己点検・評価委員会、更にその下にFD専門部会がございます。私はその主査をしている関係で今日はご報告をさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

教職大学院が平成20年度に立ち上がった時から、教育委員会、学校現場との連携・協力というの

が1つ大きな要件になっています。そういうことでFDに関しましても、カリキュラムとか授業の内容とかを開発・改善していく上では、教育委員会・学校との連携、且つやはり受講者の院生さん、この三者の連携があつてのことかなと思ひ、教職大学院では教育の質を担保するための総合的なシステムを取ってございます。

今からお話しさせていただきますのは、この4つの取り組みについてお話をさせていただきます。簡単に申し上げますと、授業等の評価については授業者である教員の目、それから受講者である院生の目、そして第三の目として教育委員会ならびに学校現場の先生方の目、この3つの目で授業を評価し、授業改善に取り組んでいくということでございます。

我々がカリキュラムの一番根幹に置いておりますのが、いわゆる到達目標でございます。ここに挙げてありますように、教職大学院で育てる人材とは高度な専門職業人、もう少し簡単に言えば大学院で学んで何かもう立派な先生になったというのではなくて、現場へ戻られてからも研鑽を続けていくという意味で、“学び続ける教員”を育成することを大きな目標にしてございます。

そういう意味で、我々がこの大学院で身に付けていただく、習得していただく、あるいは将来に向けて目指す力として3つを設定しています。これを私たちは「教職実践力」と呼んでいます。この力が、現場で教育活動を行っていく上の大きな3つの歯車として上手く連動させていくことによって、教育活動も上手く展開することができるということです。

その3つの領域の中に、評価をする観点として10項目、その具体的な到達目標を設定しているということでございます。これを頭に入れていただいて今からお聞きいただければと思います。まず、院生は入学時から修了時まで自分自身でこれら3領域10観点について自分で評価し、自分がどういう風に授業の中で学んでいくかという課題を設定します。

それを一年次、それから修了時にも自分の学びを検証して、最終的には教職大学院の現職の院生さんたち、あるいは教員養成特別コースの院生さんたちも、修了後あるいは教員として現場に立った時のキャリア・デザインを描いてもらい、自分がどういう教師を目指し、どういう課題を持って現場で取り組んでいくのかというビジョンをきちんと掲げて修了していく。その後もキャリアアップを目指して学んでいっていただく。こういうシステムになっています。

2年間には、自己評価シートにより学びの省察をし、課題を設定したり、日常的には授業を省察する機会として週録をずっと記入していったりします。いわゆる学習の履歴を書いていくのです。2年次には現場での実習が殆どですので、その週録は実習週録に切り替わります。また、授業の中では教員側からは、先ほどの3領域10観点について、観点別評価が行われます。これは個々人のいわゆる絶対評価と考えていただければ良いのかなと思います。

その資料がお手元にあるかと思いますが、こういったような内容について自己評価したり週録を記入したりしていきます。これは平成24年度に入学し、この26年度に修了した院生さんたちの平均値を示したものです。真ん中から外へ行くに従って円が広がっていつているのが分かると思いますけれども、この10観点それぞれの力が徐々に伸びていつているという結果が出ているということです。

続きまして2つ目、教育活動をチェックする機会として修士課程と同じように、教職大学院でも授業公開をしています。これは昨年25年度の様子と資料です。公開授業と、その時に修了生もお呼びして修了生の現場での教育成果、大学院で学んだことがどう活かされているのかというテーマでパネルディスカッションしました。

それと、お昼の時間帯に外部評価委員会を開催しました。これは教育委員会の方にも来ていただき、授業を見て、教職大学院の教育活動について検証していただく機会にしています。今年度についても先週に同じような形で授業公開を行いました。この時は昨年度と異なり、今年度の1年生から新しく授業として取り入れました実習科目の成果発表会として参観いただきました。

次に、今年の3月に修了された院生を派遣いただいた教育委員会、それから学校の校長先生に教職大学院のカリキュラムについてアンケート調査で評価をしてもらった結果です。これは平成26年3月ですので古いカリキュラムで学んで修了された方々の結果です。3観点については先ほどお示したものと少し変わっています。「教育的人間力」、「教育実践指導力」、「学校改善指導力（協働力）」ということと、11観点に少し変わっています。そこをお間違えのないようにしてください。

いずれにしても非常に高い評価を得ています。11観点の中でも特に教職大学院に対してこういうような力を付けてもらいたいという、例えば組織経営、マネジメントであるとか、あるいは学習指導・生徒指導、こういったところの教育課程をカリキュラムの中に授業としてきちんと位置づけて学ばせてもらいたいという要望が出ています。こういうものを受けて授業改善に取り組んでいくということです。

それから3つ目の授業評価については、修士課程と同じで教職大学院の22名のすべての教員が共通科目に17科目、専門科目に34科目、実習科目に7科目、全部で58科目において実施しています。22名の教員が1人につき大体2～3科目の授業評価を受けています。それについて自己分析をして報告書を書きます。更に教職大学院の方ではFD部会が、この授業評価を判定させていただいて3段階で評価しています。

つまり、来年度もそのままシラバスどおり続けてくださいねということと、部分的に改善を加えてください、全面的に改善を加えてください、というように3段階で判定します。実際にはこんな形で一覧が出てきます。それぞれの授業にAからCまでの判定が付けられます。これも全て院生さんの授業評価に基づいて、客観的な数値で判定をしているということです。

それから最後ですが、カリキュラムマップを作って周知しています。教職大学院では、3領域10観点について授業科目と到達目標との関連性について、一覧表でライブキャンバスの方に載せています。こちらの資料にも載っていますが、個人の観点別評価の結果が見えるようにしている部分でございませう。

ざっと教職大学院について説明させていただきました。最後に今年度26年度に修了された院生さんのアンケートに関しての結果を見ますと、だいたい8割方ぐらいが満足しているとの結果でした。特に教員としての資質・能力を高めるのに繋がったという評価をしていただいております。あともう1つの資料は、先ほど説明した週録・実習録に載せていました院生さんの自由記述の部分についてまとめたものです。これも見ていただきますと、一番上にありますように「自分の在り方を振り返り、次のステップを検討することができた」というように、今までの経験を踏まえて更に先を見通せるような、そういう見方になってきているのが読み取っていただけるかと思ひます。大体ざっと教職大学院のFDの実施状況について報告させていただきました。以上です。

(司会) 小坂先生、ありがとうございました。それでは引き続き、時間が押しているのですが、質疑の時間を取りたいと思ひます。4人の先生、前の方にお越しいただけますでしょうか。

本日は16時20分から講演会がありますから、後ろへ送ることができないということで、こちらから小坂先生、森先生、佐伯先生、梅津先生です。それでは、たぶん今日は多視点からのご発表ですので、まとめるということは難しいと思うのですが、全体のテーマ「良い教師を育てる授業」ということがFDの大きなテーマですので、その辺りも踏まえながらご質問等がありましたらお願いしたいなと思うのですが、如何でしょうか。

(山木)

森先生の授業を具体的にお伺いして、とても共感と言いますか感動しました。言葉で表すという語彙力ですね。例えば色々な音楽について、こういうところを私は学習したんだとか、磨いてきたんだということを主体的に言わせて、またお互いに批評をし合うという非常に先ほどの枠組みではアクティブ・ラーニング的な要素かなと思うんですけども。

その時に、非常に熱心に時間をかけて一生懸命やってきたんだけど、語彙力と言いますか、表現力あるいは訴求力と言いますか、そういう部分が薄い学生なんかが必ずいるんですけど、その辺りのことをどういう風に先生の場合はお考えになって、斟酌したり指導をされているのか、その辺をお伺いしたいと思います。

(司会) よろしいでしょうか。関連してご質問があれば…、ありませんでしょうか。たぶん時間がそんなにありませんので、では森先生、お願いします。

(森)

語彙力につきましては、たぶん殆ど全ての先生が抱えている問題だと思います。1つには“待つ”ということしかないのかな、というようなこともあります。決して自分のこちらの言葉を押しつけてしまうというのは拙いような気がしますので、ただ何か一言発してくれれば、それを元にこちらが更に手を差し伸べて行くことができますので、何か一言が欲しい。

その何か一言が出るまでは、ちょっと待つということしかないのかなということが実感としてあります。ただ往々にして学部生は割りと表現力があります。院生の方で、あぁ喋れないんだなという学生が目立つような気はしています。以上です。

(山木)

ありがとうございます。協働的な学びみたいなものが非常にクローズアップしている中、モデルを見せるという教育の基本的な理論がだいぶ薄くなっているような気もするんですね。その時に上手く語れて訴求力がある表現ができた人、そういう子に着目させるようなことも1つの手掛かりかなと私なんかも考えております。

(森)

実はちょっと語彙力が弱くて言葉が上手く出ないかなと思った学生に対しては、例えばなんですけど私が二通り弾いてみせて、今の演奏はどこが違う、AとBとどこが違う？と、こちらが言葉を言うのではなくて音を聞かせると、この学生はこういう音の違いをこういう言葉で言うんだよねというこ

とが分かってくると、今度は私がその言葉を使って学生に説明するということができる。何かそれも1つの手かなという気はしています。

(山木)

ありがとうございました。

(司会) ありがとうございます。あと、カリキュラムマップ、それからテキスト、教職大学院のこともありましたけれども、如何でしょうか、あと1人か2人。では西園先生、お願いします。

(西園)

26年度から学修課題というものをシラバスの中に入れたということですが、その前と入れた時と、どういう風に変化があったのか、そこら辺が端的に現象が表れたのか、どうですか？

(森)

実はまだそこまでの検証には行ってない訳なんですけれども、先ほどシラバスを読んでいるか読んでいないかという話が出ていた訳ですが、今回思ったのは授業が終わってからも良いから私の書いた学習課題を見てくれて、「あっ、森先生が言っていたのはこういうことなんだな」というのが分かってくれるというのも、1つは良いのかなという気がしています。

(西園)

例えば授業を進める中でその学修課題、先生の場合は5つ書いてあるのですが、問題解決力とかそのようなことは授業の中ではどのように具体的に求めているのか、その辺のところはどういうようにこの授業の中身と繋がっているのか。

(森)

あえて具体的にそれを取り上げるということはしておりません。あくまでも全般的なレッスンの中ということで行っていることだと思います。ただ、それが先ほどからお話しているように、この大学ならではの視点ということを踏まえて書いていますので、そういう風に学生には理解してもらっていると思っています。あくまでもそれを項目立てて、そこに焦点を特に当てているという風には考えておりません。

(司会) よろしいでしょうか。それでは、後の予定もあるようですので、これでFDの全体会を終わりにしたいのですが、最後に閉会のご挨拶を西園先生にお願いいたします。

(西園)

先生方、遅くまで26年度のFD推進事業にお付き合いいただきまして、ありがとうございました。課題も含めて少しお話ししたいと思います。

今日は、シラバスの形式や内容、新しいシラバスの書き方ということで、宮田先生にご講演をいた

いただきました。それで、梅津先生の方から本学におけるカリキュラム全体についての構造、改革の中身についてお話しいただきました。その中で出てきたことが「カリキュラム・ガイドブック」「カリキュラムマップ」など、要するにカリキュラム全体の中でどういう風に構造化しているのか。

それを基盤にし、全体と中身をどういうように構成するかということ。これがマップであったりガイドブックであったりするのですけれども、その中で授業科目と資質・能力に対応させて個々の授業がどういうように位置づいているのか。あるいは更に各コース・専修において4年間でどのような学びを進展させるのか。授業科目の関連性というようなどころまで、今作成されている訳です。

今日ご講演いただいたのは、その中で個々の授業科目のシラバスをどう作るのか。要するに、全体と個々の授業部分の中身をどうやって作っていくかということ、示唆あるご講演をいただきました。そういう全体と部分の中で、現在教員養成として、あるいは大学としての質保証ということはどう担保するのかということがある訳です。

したがって、こういうカリキュラムというのは、ある意味その質保証をするための道具になる訳ですが、その道具を全体と部分に再構築していくということになるかと思えます。とりもなおさずそれは個々の授業の中で目標を立て、質的な保証を作っていくということになるかと思えます。そういう意味で、このシラバスのことにおいて私が興味をもったのはグラフィック・シラバスということで、それぞれの学問分野の知識・概念をマップ化していく。そして学生にそれが見える形にしていく。

それからアクティブ・ラーニングということで、このアクティブ・ラーニングについては小・中・高等学校においてもそのような授業を実践するということが求められています。そういった意味で大学の中でも授業の内容を変えていく必要がある。それから授業科目のナンバリング化ということです。こういう部分も今後やっていかなければいけないことかなということでした。

学修課題について森先生に発表いただき、それから佐伯先生には専門科目の算数について、十進法という小学校で習う内容について、二進法というものを対比させることによって、十進法の定義を理解していく。教科専門の新しい授業のあり方ということでした。それから小坂先生には教職大学院のFD事業について、学び続ける教員をどうやって育てるかということを中心に発表いただきました。

FD推進事業について、本学が抱えている課題について今回取り上げたのですけれども、このように参加者が少ないということが例年ありまして、昨年度は7月にこの全体会を行った訳です。それは参加者を増やすということで試みたのですが、やはり参加者が少ないということがありました。

このような現状の中で、FD推進事業というのは平成19年、国の答申の中で大学のFD推進事業は組織的に研修をするようにということになっているのでして、そういうような目的をどうやって本学の中で実現するのかということが大きな課題ではないかというように思います。この点をまた教員の中のFD推進委員会等で検討いただいて、全学的なFD推進となるように改善していただければと思います。

今日は4人の先生方、時間を割いてご準備いただき、ありがとうございました。感謝を申し上げます。

(司会) それでは、これで26年度のFD全体会を終了させていただきます。最後にもう一度、先生方に拍手をお願いします。(拍手) ありがとうございました。

それで途中でもお話ししましたが、アンケートを必ず出して帰っていただきたいと思います。外に

ボックスがありますので、アンケートを必ずお出しただけたらと思います。よろしく願いいたします。今日は進行が悪く、遅くなってしましまして申し訳ありませんでした。

IV 公開授業週間

平成 26 年度鳴門教育大学 F. D. 推進事業公開授業週間実施要項

- 1 目的 教員相互の授業参観を通して授業改善に取り組む意識を高めるとともに、具体的な授業事例をもとにして、各教員の授業改善を図ることを目的とする。

- 2 期間 平成 26 年 10 月 14 日(火)～平成 26 年 10 月 20 日(月)
参観申込期日：平成 26 年 10 月 8 日(水)

- 3 事項
 - ① 公開授業は、原則として公開授業週間中に開講されている全授業科目とする。ただし、嘱託講師担当の授業科目は除く。
 - ② 公開されている授業科目は、すべての教員が参観できる。
 - ③ 参観者は、参観日時、科目名を記入した参観申込を、指定の期日までにメールにより教務企画課へ送信する。教務企画課は、授業担当教員にメールを転送する。
 - ④ 参観者は、教室への授業途中の入退室はできない。参観者は、参観中は静観する。
 - ⑤ 参観授業に対する授業研究会は行わない。授業に関する意見交換は、参観者と授業担当教員とで協議の上、直接行うこととする。
 - ⑥ 特別公開授業を含む公開授業すべての中から、原則として 1 授業科目以上を参観し、所定の「授業観察記録」に記入し教務企画課まで提出する。
(ただし、特別公開授業については、参加申込及び「授業観察記録」の提出は要さない。)
 - ⑦ 提出された「授業観察記録」は教務企画課において取りまとめ、授業担当教員に送付する。
 - ⑧ 授業担当教員は、「授業観察記録」に基づき、授業改善を行うこととする。

V 平成 26 年度 F D 推進事業の成果と課題

平成 26 年度 F D 推進事業の成果と課題

本年度の F D 推進事業では、昨年度に引き続き①公開授業週間、②特別公開授業、③特別公開授業に係る授業研究会・F D ワークショップ、④全体会を実施している。昨年度の『ファカルティ・デベロップメント推進事業報告書』の「平成 25 年度 F D 推進事業の成果と課題」には、以下 3 点が課題として示されている。

- 1) 教員養成大学の教員として必要な職能や教育力の内容を明確化し、共通理解を図ること。
- 2) 教育課程の系統性や内容・方法を吟味・改善しながら、カリキュラムの検証を行うこと。
- 3) 職員間の共同関係を確立させること。

まず、本年度最初の F D 委員会(4/28)において上記 3 点について取り組んでいく事が確認された。また、実施日程については、昨年度の実施状況をふまえて本年度は従前通り 10 月下旬に実施することが確認された。そして、第 2 回の F D 委員会(6/18)で本年度の F D 推進事業の具体的な内容が検討され、平成 24・25 年度特別経費(プロジェクト分)事業「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」で開発した小学校教科専門科目テキストを使用している授業を中心に特別公開授業を実施し検証すること、全体会において、SPOD(四国地区大学教職員能力開発ネットワーク)における講師派遣事業の講演(講師:徳島大学宮田政徳先生)をお願いすること等が確認された。また、全体会の発表・報告については、カリキュラムマップ・ガイドブックの開発と活用についての発表、シラバスに学修課題を記載したことをふまえての発表、小学校教科専門科目テキストの活用についての発表をお願いするとともに、本学教職大学院における F D 事業についての報告をもとに協議を行うこととなった。

さて、実際の特別公開授業では、公開期間との関係もあって、小学校教科専門科目テキストを使用した授業は多くはなかったものの、研究会・F D ワークショップにおいて、テキストの内容及び運用について賛否を超えて意見が出されており、テキストの内容の見直しや、運用方法について検討が進められることで教員をめざす学生にとって有意義な授業への改善が期待できること。また、全体会の質疑応答において本学のカリキュラムマップ・ガイドブックがグラフィックシラバスに似た機能を有しており、適切な運用は学問分野の知識・概念を学生が分かる形で“見える化”することにつながる。そして、シラバスに学修課題を明示したことで、受講前のみならず受講後に於いても学生の学びへの気づきが期待できることが確認される等、授業改善の視点が明らかとなった。

こうした成果とともに、以下のような今後の課題が明らかとなってきた。

- ① 大学全体のカリキュラムを俯瞰しつつ、それぞれのコースに所属する学生が卒業時にどのような資質・能力を身につけて卒業することを期待しているのかといった視点からコースのカリキュラムや授業を改善していくことが必要である。
- ② それぞれの授業において学ぶ学問分野の知識・概念、その系統性、関連性等が学生にとって“見える・わかる”ように授業を改善していくことが必要である。
- ③ 今回は教職大学院の F D 事業について知る機会を得たが、これを機会として教職員間のさらなる共同関係を確立し、F D 推進事業の組織的な研修の実現をめざすことが必要である。

なお、これらの課題を実現していくためには、カリキュラムマップ・ガイドブックや、小学校教科専門科目テキスト等の改善と有効な活用法についてのさらなる研究・開発も必要になるであろう。

お わ り に

理事・副学長（教育・研究担当） 西 園 芳 信

本学のFD事業は、教員の授業実践力の向上と授業に対する学生の認識の深化を図ることを目指すものである。平成26年度のFD事業の内容は、①公開授業週間、②特別公開授業、③授業研究会・FDワークショップ、④特別公開授業に係る全体会からなり、具体的には平成25年度と同様、次の3点を目的にして実施された。

1. 教員養成大学である本学における、教育実践力を培うためのよりよい授業の在り方を共有する。
2. 教員養成大学である本学における、FDの在り方を構築する。
3. 本学の学生の現状を踏まえた、授業改善の課題を明確にする。

以上の平成26年度のFD推進事業の中で、特別公開授業に係る授業研究会・FDワークショップについては、まず特別公開授業では、「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」で作成した小学校教科専門テキストを使用しているものを中心に実施し、公開された授業に係る授業研究会を実施することを通して、モデルカリキュラムの一層の充実を図ることを目的とした。また、このテキストを使用していないコースについては、従前通り他教員の優れた授業実践を参観し、公開された授業に係る授業研究会を実施することを通して、教育実践力を培うためのよい授業の在り方を共有することを目的とした。

前者の小学校教科専門テキストを使用した授業研究会では、テキストの内容が学生の知識・経験とのズレがあること、もう少し読み物的にすること、あるいは、教科専門の目的に則した内容にすべき等の意見が出されている。後者の授業実践を参観しての授業研究会では、学生に教育実践力を培う観点から、資料の提示の仕方や専門的内容を授業実践に結びつけて解説することの必要性、教育実践力育成の観点から授業の前に教科専門の理解をさせるべき等の意見が出されている。

次に、特別公開授業に係る全体会では、次の3点の内容で実施した。

- ア. 外部講師、宮田政徳先生（徳島大学）の講演、「学生の学びを促すシラバスの書き方」を実施し、シラバスの機能と書き方についての理解を深めること。
- イ. シラバス及びモデルカリキュラムで作成した小学校教科専門テキスト並びにカリキュラム・ガイドブックの検証の報告。
- ウ. これまで学部・修士課程のFD事業と教職大学院のFD事業が別個になされ交流がなく、これを改善することから、教職大学院におけるFDの実施報告。

この中で、ア. のシラバスの書き方についての講演は、グループで課題に即したシラバスを構想するというワークショップ型のもので、シラバスの目的や機能、形式を理解するのに役立った。また、授業における学問分野の知識・概念をマップ化するという「グラフィック・シラバス」という新しいシラバス形式の紹介があり、有意義な講演であった。

カリキュラム・ガイドブックやカリキュラムマップは、カリキュラム構成において、個々の授業を目的に則してどう構成するのかというときに問題になることで、これに対しシラバスは、個々の授業の目標や形式をどうするかという問題となる。教員養成として学生の能力の質保証を考えると、この両側面から改善していくことが必要である。今後のFD事業では、これを視野において取り組んで行くことが求められる。

最後になったが、本報告書の作成に当たっては、学部・大学院FD委員会委員、教務委員会委員、ならびに授業担当教員、学生諸君、関係の事務職員の方々にご尽力、ご協力を頂いたことを記すとともに、あらためてこの場を借りて関係各位に厚くお礼申し上げます。

学部・大学院ファカルティ・ディベロップメント委員会委員（平成26年度）

理事	西園芳信	委員長
教授	葛西真記子	基礎・臨床系教育部
教授	立岡裕士	人文・社会系教育部
教授	秋田美代	自然・生活系教育部
准教授	小山英恵	芸術・健康系教育部
教授	木内陽一	基礎・臨床系教育部
准教授	石坂広樹	自然・生活系教育部
准教授	山田芳明	芸術・健康系教育部

平成 26 年度
ファカルティ・ディベロップメント推進事業実施報告書

平成 27 年 3 月発行

編 集 鳴門教育大学 F D 推進事業委員会

発 行 国立大学法人鳴門教育大学
〒 772 - 8502 鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地

TEL 088 - 687 - 6093

FAX 088 - 687 - 6107

印 刷 協業組合 徳島印刷センター